

西洋古代哲学史 第1回 (2015.04.09.)

Q.1 今日の講義を聞いて、「哲学とは?!」ということが少し理解出来たような気がします。また、アリストテレスなど、哲学者は変わり者が多いのかなあと思いました。

A.1 アリストテレスは、ギリシアの哲学者の中でも、一番、変わり者でない部類に属すると思いますが、「変わり者」というのも、何が「変わっている」のか「変わっていないのか」を考えてみる必要があるでしょう。

Q.2 先日、ギリシア神話の本を読んだ際にふと気になったのですが、ギリシア哲学と神話は関わりはありますか？ 授業からそれた質問ですみません。

A.2 関わりはあります。しかし、実際に、ギリシアの人々に伝えられている「神話」と、例えば、プラトンが対話篇の中で用いる「ミュートス（これも、訳せば、神話）」とは、違います。「ミュートス」は、人間の理性に基づいて、できるかぎり、限界まで、人間のことばで合理的に説明しようとしても、説明出来ないことを、つまり、「ミュートス」でしか語れないことを語るのです。この点、後期シェリングが、『神話の哲学 (*Philosophie der Mythologie*)』、そして、さらに、『啓示の哲学 (*Philosophie der Offenbarung*)』に行き着いたのは、哲学にとって何か示唆的です。はじめから、理性によって探究することを放棄するのではなくて、できるかぎり、限界まで、理性によって探究する努力をした上で、到達した境地を言っているのではないかと思われるのが、理性を信頼して探究を続けた、パスカルの次の言葉です。

La dernière démarche de la raison est de reconnaître qu'il y a une infinité de choses qui la surpassent. Elle n'est que faible si elle ne va jusqu'à connaître cela. [Pascal, *Pensées*, Lafuma 188 ; Brunschvicg 267.]

理性の最後の一步は、理性を超える事柄が無限に存在する、ということを確認することである。理性がそれを認めるところにまで到達し得ないならば、理性は弱いものでしかない。

Q.3 哲学を学ぶときどういった態度でのぞめばいいですか？

A.3 精神（心）の姿勢を正して臨んで下さい。??

Q.4 2ページ53行目からあがっている各学問を束ねる *philosophia* というカテゴリー(?) は、アリストテレス当時かたまったものですか？

A.4 アリストテレスによる学問論の記述によれば、少なくとも、そう言えますが、アリストテレス以前、すなわち、プラトン、ソクラテス以前から、すでに、個別の学問分野とは別の次元で、全体にわたるもの（束ねる、といえるかどうかわかりませんが）としての *philosophia* という意識が存在していたように思います。なお、*categorize* の目的語としては、分類され、類別化される、個々の学のほうであるのが、普通ですから、この文脈で、おっしゃりたいことを付度すると、「位置づけ」くらいが適当ではないでしょうか。

Q.5 期末の成績は何でつけられるのですか？

A.5 筆記試験ならば、内容の出来ですし、レポートにした場合は、その形式（しかるべき書式に従っているかどうか）と内容です。書式や書き方のルールについては、機会をみてお話しします。

Q.6 レポートの方が良いです。

A.6 従来も、レポートにしてきたので、今回も、レポートにするつもりです。事前に、課題と提出期限は指示します。

Q.7 大学の哲学科は哲学ではなく、哲学学をやっている、とのようなことを聞いたことがあります。過去の文献研究が無意味だとは思いますが、何か個別の専門（芸術とか、スポーツとか、科学とか...）を極める方が、真理に近づくことができるのではないかと考えます。先生はどう思いますか？

A.7 学(問)としての哲学に限定して考えると、哲学(問題そのものを自分の頭で考える)と西洋哲学史(過去および同時代の、他の人が、問題そのものを考えたことを理解する)の二つの、実際には、切り離せない作業をやっているのが、「哲学」だと思います。「真理」とは何かという理解の仕方にもよりますが、前者、つまり、哲学(問題そのものを自分の頭で考える)だけでは、ひとりよがり、自分勝手な理解や主張になりがちです(もちろん、学としての哲学であることを放棄し、自分だけわかって納得すればよい、というのなら、これでもかまいませんが)、また、後者、つまり、哲学史の研究だけなら、これは徹底すれば、史学になるはずで、哲学ではありません。もっとも、哲学史の研究も、研究する本人の哲学的考え方に影響されるので、完全に、何からも独立した客観的な哲学史研究はありえませんが、できるかぎり、自分の考えとは別に、テキストそのものが何を言っているのかを読みとる努力をする必要はあります。単に、「哲学」という場合、赤井は、上記の意味での二つ、すなわち、学問としての、哲学(問題そのものを自分の頭で考える)と西洋哲学史の研究(過去および同時代の、他の人が、問題そのものを考えたことを理解する)をわがちがいたい活動・営みとして考えています。そして、その哲学も西洋哲学史の研究も、それを遂行するために必要な道具(論理的思考力や、読解力や・・・)があるのに、それを身につけていない人が、自分のやっていることを哲学と称している(もちろん、自称するのは自由ですが、自分がやっていることが本当に哲学の名に値するのか、自己点検してほしいところです)ことが、哲学にとっての不幸、というか災難なのです。プラトンのテキストに、次のように言われています。

Τὸ γοῦν νῦν ἀμάρτημα, ἣν δ' ἐγώ, καὶ ἡ ἀτιμία φιλοσοφία διὰ ταῦτα προσπέπτωκεν, ὃ καὶ πρότερον εἶπομεν, ὅτι οὐ κατ' ἀξίαν αὐτῆς ἀπτονται· οὐ γὰρ νόθους ἔδει ἀπτεσθαι, ἀλλὰ γνησίους. [Plato, *Respublica*, VII, 535C5-8]

「少なくとも、現在行なわれている間違いと、哲学にふりかかっている軽蔑とは、こうしたところから起こっているのだからね」とぼくは言った、「つまり、前にも言ったように、その資格もないような人々が哲学に手をつけているからなのだ。というのは、生まれのいかかわしい者たちがこれに手をつけてはならなかったのであって、正しい生まれの者たちにだけそれが許されるはずだったのだから」(藤澤令夫訳)

また、「哲学学」というのは、大学で行なわれている哲学と称するものを、揶揄しているような表現だと思いますが、もし、そういう「学」が「学」として成立しているならば、それはそれで結構なことですが、現実には、「哲学学」にさえ、なっていないのではないですか。文献学的手法に基づいた哲学史の研究もできない者が、哲学をやるから、話がややこしくなる、と赤井が教えを受けた先生の世代の人たちは言っていました、その通りだと思います。その点で、学部の「西洋哲学」という分野名は、ある誤解を誘発しやすく、適切な名称ではない、と考えます。これは、名称と内実という重要な問題なので、折りをみてまた取り上げたいと思います。なお、「学」「学問」ということへのこだわりについては、ニーチェが次のようなことをつぶやいているのを思い出します。

Nachweis der barbarisirenden Wirkungen der Wissenschaften. Sie verlieren sich leicht in den Dienst der „praktischen Interessen“. [Nietzsche, *Philosophenbuch*, MA, 6, S. 8.]

学問の野蛮化する効果を指示すること。学問は「実践的関心」への奉仕のうちに、容易に、自己を失って行くものである。(渡辺二郎訳)

Q.8 ズボンのポケットを修繕した時は教えて下さい。

A.8 はい。ただ、今のところ、修繕に使える適当な布がないので、いつになるかわかりません。

西洋古代哲学史 第2回 (2015.04.16.)

Q. 1 紹介された本で二段にわかれているものとわかれていないものがありますが、特に意味はないのでしょうか？

A. 1 あります。二段にわかれているものが、ベッカー版で、国際的にアリストテレスを引用する際の規準になっているものです。しかし、これは、高価なので、世界中で、アリストテレスをギリシア語原典で読んでいる人が皆これを直接見ることができるわけではありません。そこで、わかれていないもの（コピーは、Oxford University Press の Oxford Classical Texts, 略して OCT のシリーズで出版されているもの）のような、廉価版（といっても、数千円する）で、読むわけですが、二段にわかれていなくても、ベッカー版の頁と改行までわかるように、再現されていることを、ふたつの版を比較して見ることによって、体感してもらいたかったのです。

Q. 2 Homeros が歌った伝説というのが神話のことになるのでしょうか？ 伝説をそのまま歌って哲学となる意味がわかんないですが、どういうことですか？

A. 2 哲学であるとは言っていません。p. 3, ll.18~126 の Homeros ~ エウリピデスのところは、彼らの作品それ自体が、「哲学」なのだと言っているのではありません。（当時のギリシア人にとっては何だったかとは別に、現在の分類では）「文学」です。しかし、少なくとも、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの悲劇作品には、哲学から見ても、哲学の考察の対象にできる人間の問題が描かれている、ということを描いたまで、です。しかし、そのこと（人間の問題）は、突然、生じたわけではなくて、ホメロス以来の作品の中で、徐々に準備されて来たということを行っています。なお、ホメロスは、英雄叙事詩であって、（シュリーマンの発掘でわかったように）トロイア戦争など、人間の行ないを歌っているのが主で、その中で、神々のことも語られるだけです。神話を主に語っているのは、ヘシオドスの『テオゴニア（神統記）』やアポロドロスの『ピブリオテーケー（ギリシア神話）』などです。

Q. 3 板書がもう少し整理されるとうれしいです。

A. 3 申し訳ございません。板書のことを意識できているときは努力しますが、思いついたことを書き始めると、制御できなくなるので、ご迷惑をおかけしますが、ご寛恕下さい。

Q. 4 古代ギリシア哲学者の中であまりとりあげられないけれど（ママ、も）おもしろい考え方をする人（ママ、が）いたら教えて下さい。

A. 4 岩波文庫に3分冊で訳出されて（い）る、ディオゲネス・ラエルティオス（加来彰俊訳）『ギリシア哲学者列伝（上）（中）（下）』（を）自分で読んだらいい（と）思うよ（思います）。

Q. 5 渡された資料が何が何だか全く読めなくて（当たり前ですが）哲学する人はこれを読めるのかとおどろきました。先生ほどになるとスラスラ読めるのですか？

A. 5 私程度のへぼ教師では、スラスラ読めません（ちょっと、ウソ）。学部生の頃から、ギリシア語、ラテン語の文法を学び、引き続き、継続して、講読・演習の授業で読むトレーニングを何年も続けて、なんとか読めるようになるのが普通です。しかも、そういうトレーニングを受けていないと、哲学の研究者としてやっていく資格はありません。第1回へのコメント、p. 2 の ll. 19~26、プラトンの『国家』からの引用を読み直して下さい。プラトンの言っている「正しい生まれ」というのは、現在の状況に適用して考えると、本人の素質の他に、古典語（ギリシア語、ラテン語）と論理学を適切に学んでいる、ということが含まれます。そうすると、プラトンのことばは、現在、哲学をやっていると自称している連中の多くにあてはまります。

Q. 6 哲学史の勉強をしていると、哲学者の名前が必然的にたくさん登場するので、古代ギリシアにはものすごい数の著名な哲学者がいたのだなと思ってしまいがちなのですが、実際の人口に対する彼らの割合はどのくらいだったのでしょうか？ また、彼らの収入源はなんだったのかも少し気になります。

A. 6 よい質問です。というのは、赤井が最も関心がなく、よく知らない分野に関する質問だ

からです。哲学の内容が、物理的環境や経済生活（マルクスの弁証法的唯物論では、いわゆる「下部構造」）に影響されるとすれば、哲学史の研究といえども、もっと、社会経済史に関心をもつべきでしょうから。誰のことばだったか思い出せないのですが、（古代の）ギリシア人誰もが哲学者であるように思っている人がいるが、それは違う、ギリシア人の多くは、普通のおじさんやおばさんたちだ、というようなことを言っているのを讀んだことがあります。実際、私は、西洋史学、特に、古代史の専門家に任せっきりの問題ですので、哲学史・思想史の専門家でこういう問題に言及している人は少なく、言及していても、古代史の専門家の研究を紹介している場合が多いのではないのでしょうか。そういう中で、研究対象を限定してではあるけれども、史実的なことにも、自分で調べて言及しているのは、廣川洋一先生の『プラトンの学園アカデメイア』（岩波書店、1980年；講談社学術文庫、1999年）の特に、V章「経済」でしょう。古代史プロパーの研究は（日本語に限らなければ）他にも多くあると思います。従って、以下は、統計的数値を示すことができるような何らかの史料に基づいたことではなく、単なる推測ですが、二つのことを考えることができます。ひとつは、講義のプリントでも1番目に言及したように、個別の学問の総称として「哲学（ピロソピア）」と言われたことから、およそ、文献に名前が残っているような学問的に知的な活動をしたギリシア人は、みな、広い意味で「哲学」をやっていたことになるので、例えば、「天文学」しかいなかった者も哲学者として伝えられる可能性があること、です。実際、イソクラテスがたずさわっていた分野は、現在では、狭い意味では、「弁論術」や「修辞学」ということとなりますが、イソクラテス自身は、自分がたずさわっていることを「哲学（ピロソピア）」と言っています。もうひとつは、古代のギリシア人は、ローマ人と比較しても、他の民族と比べても、確かに、「何故なのか」という、いわゆる哲学的に根本的な疑問に突き動かされて知的活動を行った人の割合が高かったのかもしれない（これは、文献を讀んでの、あくまでも、印象です）。ギリシア人ではありませんが、19世紀末から20世紀のポーランドは、人口が少ないのに、世界的なレベルの論理学者、数学者を多数輩出していますが（だからといって、ポーランド人はみんな論理学者、数学者だというわけではありません）、これには、ポーランド人が優秀だということの他に、何か理由がありそうに思えるのですが、それと似ている現象だと思います。

Q.7 第1回の授業のコメント一覧を見てちょっと思い出したのですが、ギリシア神話のパンドラの箱について、解釈が大きく2つに分かれるそうです。「人類に希望がもたらされた話」と「希望は今も箱の中にある、つまり、人類に希望だけがもたらされなかった話」。先生はどちらだと思われるか。

A.8 これも、私の関心から、少しそれる、という意味で、よい質問です。というのは、私は、理性や知性によって合理的に理解できる範囲内で哲学を考えていて、神話や啓示が必要になる手前で踏みとどまろうとしているからです。そうすると、この質問には、次のように言えると思います。質問中に使われている「希望」と「もたされる」を二通りの意味に解することによって、「希望は今も箱の中にあるが、そのことによって、人類には希望がもたらされている」と、つまり、示された2つの解釈のどちらでもあるし、どちらでもない、ということです。これと同じ言い方ではないですが、おそらく、同じ意味のことを、ニーチェが、『人間的、あまりに人間的I』の71節で、言っています。（資料参照）

Q.9 （第1回の）質問用紙のQ7に対する答え、非常に重くうけとめることができました……

A.9 恐縮です。

Q.10 私の友人や知り合いの中でも、博識だなと思う人が何人かいるが今日の博識に関する考え方はとても新鮮だった……

A.10 確かに、博識である、ということは、本人が何か哲学的、理論的主張をもっていなくても、博識であること、それだけで、他人に対して、迫力というか、何か、すごいな、と思わせる威圧感のようなものがあります。これは、素人の印象ですが、そういう博識を尊重するような傾向が、中国の古代思想にはあるような気がします（書き下しでもよいですが、四書五経は読みましたか）。

西洋古代哲学史 第3回 (2015.04.23.)

Q.1 点字ブロックとエレベータの件、了解いたしました。

A.1 周囲の人、特に、後輩にも伝え、「点字ブロック倫理」「エレベータ倫理」(ってどういうものかわかりませんが)の創始者、「点字ブロック倫理」「エレベータ倫理」のタレースたれ!

5 Q.2 (第2回へのコメントの)A.10の末尾の「四書五経は読みましたか」というご発言の含意が理解できませんでした。ご解説いただければうれしいです。

A.2 博識との関連で、文字通り、「四書五経」を読んだことがあるか?と問いかけているのです。特に含意というようなものはありません。中国の儒教の根本的な傾向としては、「君子以多識前言往行以畜其徳(君子ハ多ク前言往行ヲ識ッテ以ッテ其ノ徳ヲ蓄フ)」(『易経』大畜)つまり、
10 博識・博学を尊ぶのに対して、この点を、後の思弁的な宋学から批判されるのも、根本に、博識・博学があるからです。

西洋哲学史を自分の主な研究対象にしていると、自分が扱っている他にも、違う世界があることをつい忘れて、自分が知っている西洋の哲学がすべてだ、と思ってしまうがちですが(ドイツ哲学ばかりやってる連中がよい例です)、自分とは違う発想のものに常に触れて、自分の考え方、
15 発想が一つの傾向に凝り固まらないようにするために、例えば、「四書五経は読みましたか」と訊いてみた、と思っ下さい。現在の広島大学文学部の哲学・思想文化学のコースでは、各自の自由な選択によって、インド関係や、中国関係の概説を履修できるはずですが、私が学んだ大学では、哲学を専門とする学生は、西洋のことばかりでなくて、インド哲学史概説や(当時の言い方で)中国哲学史概説をとらなければならないようになっていました。私は、概説だけでなく、サ
20 ンスクリットや、ついでに、荻生徂徠の『論語徴』を読む講読までとっていました。

『大学』『中庸』は、短いのですが読めますが、『論語』『孟子』は、ちょっと量がありますね。(私は、大学に入るまでに、『論語』は、貝塚茂樹先生の解釈で全部読んでいました。以前は、宇野哲人、金谷治、二畳庵主人(加地伸行)の各先生の通釈がそれぞれ違う所があつておもしろいので、ギリシア語やラテン語のテキストを読む演習や読書会の最初の10~15分を使って、学生諸
25 君と読みくらべてから、授業に入る、ということをやっていたことがあります)しかし、『詩経』『易経』は、なんとかなつても、『書経』『礼記』『春秋』はちょっとしどいかもかもしれません。ついでに、インド関係では、例えば、モークシャーカラ・グプタ(11~12世紀)の『タルカ・バーシャー(論理のことば)』、ヴァスバンドゥ(5世紀)の『アビダルマコーシャ(俱舎論)』も。

Q.3 前回のコメントに関して質問です。哲学をやる人は古典語と論理学を適切に学ぶ必要があると書かれていましたが、論理学とはどのような学問なのでしょう?
30

A.3 20世紀末から21世紀始めの大学で(つまり、現在ですね)、専門としてではなくて、大学生の教養科目として、論理学をやったと言えるのは、「第1階の述語論理(ということは命題論理は既知のものとする)と、その自然演繹」を学習している、ということになるでしょう。「第1階」とか「述語論理」とか、それに「自然演繹」とか、何のことか、まず、自分でわかるところまで調べてみて下さい。哲学の分野では、集中講義で、福岡大学の関口先生に「論理学」を担当して
35 いただいていますので、それに出てみるとよいでしょう。また、私が、かつて行なった授業や、現に、他の大学で行なっている授業の資料をpdfで閲覧できるようにしてありますから、それを見ても、大体、どんな感じかわかると思います。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/akyah59/> → 授業関係 → 「論理学」関係

Q.4 ……ニーチェというと、とてもすすめてくる人もいれば、「あまりおすすめしない」と言う人もいて、他の哲学者にくらべて(あくまで個人的な印象です)賛否両論が激しい気がします。何故ですか。……「全能者のパラドクス」なるものを知り、とても興味をもったので自分なりに考えてみたりインターネットで調べてみたりしたのですが、途中で行き詰まっ
40 いました……腑に落ちません。

A.4 ニーチェは、実存主義や文明批判とかいう点では、重要な著作を残していて、西洋古典

文献学の分野では、学術論文を書いていますけれども、学としての哲学の分野で、厳密に、学術論文を書いているかということ、書いていないので（ですから、哲学ではなくて、ドイツ文学でも扱われます）、「のんきな哲学者」と評した先生もおられます（ニーチェ自身は、のんきどころか、必死だったでしょうが）。ヤスパースのアドバイスも参考になります（資料参照）。……

5 いわゆる「全能者のパラドクス」については、私は、13世紀のトマス（・アクィナス）の立場に賛成で、それは、「全能」の及ぶ対象を、自己言及的な場合と、自己以外を対象とする場合を区別しても、「全能」性は損なわれない、とする考え方です。これは、嘘つきのパラドックスや、集合に関するラッセルのパラドクスと通じるところがあると思います。

Q.5 「ピタゴラス（ママ、ピュタゴラス）にとって数は質料因」という点がよく理解できませんでした。具体的にはどういうことなのでしょうか。

A.5 具体的にも抽象的にも、ピュタゴラス派にとっては、すべてのものは、文字通り、数を素材（材料）としてできている、ということです。

Q.6 古代哲学者たちは哲学者という職業だったのですか？他に何か仕事をしていたのでしょうか？

15 A.6 現在の感覚で、職業や仕事を生計を立てるための手段と考えると、多くの哲学者は無職です。つまり、生きるために毎日、自分が働かなくても生活できる身分だったということです。そういう状態を「スコレー（暇、σχολή, scholē）と言いますが、schola, school, écoleの語源ですが、今では中味が全く違ったものになってしまっています。大体、本人に生活の心配がなく、暇でないと、「世界は何かからできているか？」とか「すべては、ケノン（空虚）とアトモン（原子）からなる」とか、直接、役に立ちそうもないことをあれこれ考えたりできないでしょう。前回のQ.6に

20 対して、廣川洋一先生の『プラトンの学園アカデメイア』（岩波書店、1980年；講談社学術文庫、1999年）の特に、V章「経済」を紹介しましたが、それによると、プラトン自身は、自分の生活のための労働はしていません。親から受け継いだ財産があって、それは、土地や建物、それに奴隷たちです。彼らは、果樹栽培に従事していたようで、特に、オリーブの栽培によって、生活して

25 いたようです（プラトン自身は働いていません）。それに、プラトンの作った学園「アカデメイア」もプラトンの時代は授業料は一切徴収しなかったようです。これは、ソクラテスが、他のソフィストと違って、一切、授業料を受け取らなかった伝統を受け継いでいるようです。そのソクラテス自身は、田中美知太郎先生の『ソクラテス』（岩波新書、1957年）によると、母が産婆をしていたのは本当のようですが、父が石工だったというのは、疑わしく、父の代には相当の資産が

30 あつたらしいのですが、ソクラテス自身は生活のために働くことはなく、父から受け継いだ資産を食いつぶして、だんだん、貧乏になっていったようです。しかし、裕福な友人らの援助もあつて、生活には困らなかったようです。どうも、職業についての考え方が、現在の我々とは全然違うようで、田中先生の次の言葉は、示唆的です。

35 今日的生活では、それ（生計）は何か一大事のように考えられていて、普通の生活水準を維持するのにも、われわれは淡々として働かなくてはならない。しかしむかしのギリシア人は、われわれのその生活態度を、むしろ不思議に思うかもしれない。そのような贅沢生活を、どうにか維持するために、毎日忙しく働くよりは、むしろ生活程度を低くしても、より多くの閑暇（スコレー）をもちたいと、かれらは考えたであろう。[田中美知太郎『ソクラテス』（岩波新書、1957年、p. 29.)]

40 Q.7 結局アリストテレスの四原因とは、質量（ママ、質料）因、形相因、動因、目的因の四つで、作出因は動因とほぼ同じものと考えてよいのでしょうか？

A.7 よいです。作出因は動因の一種で、動因のうちに含まれる、と言えばよいでしょう。

Q.8 アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの悲劇作品に描かれている哲学の考察の対象にできる人間の問題とは、具体的にどのようなものがありますか？

45 A.8 例えば、ソポクレスの『オイディプス王』を読んでみてください。

西洋古代哲学史 第4回 (2015.04.30.)

Q. 1 哲学にはおわりというかゴールというものはあるのでしょうか。何だか考え始めたらキリがないような気がしているのですが...

A. 1 どの立場から見ても、妥当するような絶対的なおわりはないと思います。その都度、範囲・領域限定の結論はあると思いますが、学としての哲学は、そういう範囲・領域限定の考察の積み重ねです。学としての哲学、という枠をはずせば、直観や悟りによって、最終的な答を主張することは自由ですが、それは、もう、宗教というか、思い込みのようなもので、他の人に対して、学問的に論証できない、という意味で、説得力がありません。

Q. 2 322 AC を境にアリストテレスの思想は発展しなくなったということですが、それは彼の考えが重要視されなくなったということなのでしょうか？

A. 2 そういうことではなくて、AC 322 年は、アリストテレスが亡くなった年です。そして、ひとつの見方としてですが、タレース以来、ソクラテス、プラトン、アリストテレスと次々と何か新しい考え方が提出されて来たギリシア哲学の分野では、アリストテレスより後の人たちは、何かアイディアを出しても、ソクラテス、プラトン、アリストテレスまでに出た考え方の言い換えだったり、解釈だったり、根本的に新しい考えは出て来なくなった、という意味です。別の言い方をすると、アリストテレスまでのところで、ギリシア哲学としては、考えられるほとんどすべての問題提起と、その解決案が提示されてしまっている、ということです。このことは、プラトンやアリストテレスの考え方が重要視されなくなった、ということではなくて、むしろ、その逆でしょう。

Q. 3 ... そこで、質問ですが、西洋哲学の中で人気のある（研究者が多いなど）哲学者いますか？

A. 3 哲学の学会の会員になっている人とか、大学の哲学の教員の専門が何かを組織的に調査したことがないので、正確なことはわかりません。哲学教室の学部卒論と修論のテーマを何年分か見て、傾向を調べる、ということをして10年毎くらいに学生がやっていますが、これは、学生が教員の専門に影響を受けている場合があるので、日本全体、世界全体の傾向とは違うのではないかと思います。哲学をやっていることになっている（皮肉をこめた言い方だと自分でも思いますが）人の、興味関心についての社会学的生態調査としては、意味があるかもしれませんね（誰かやってくれないかな）。日本と日本以外で、国によっても異なるかもしれませんが、私が学生時代から周囲の人を見ていての印象で言えば、時代では、近現代が一番多く、次が、古代、そして、一番少ないのが、中世という感じです。そして、近現代の中では、ドイツ系が一番多く、英米系、フランス系、その他、という感じでしょうか。ドイツ系のなかでは、私の学生時代は、カントとヘーゲルが拮抗して多かったのが、その後、カントは相変わらずですが、ヘーゲルはちょっと減った感じです。しかし、広島では、相変わらず、ヘーゲリアンがカンティアンより多くいる感じ（学生・院生）。

Q. 4 ... アリストテリアンという言葉を知りました。プラトニアンという言葉もあるのですか？

A. 4 ありません。あるのは、プラトニストです。Aristotelian (アリストテレス学徒, アリストテレス主義者) のように -an となるか、Platonist (プラトン学徒, プラトン主義者) のように -ist となるかは、その語ごとに決まっています。英語表記では、思いつくままに、-an となるのは、Epicurus → Epicurean, Descartes → Cartesian, Kant → Kantian, Hegel → Hegelian, Schelling → Schellingian, -ist となるのは、Thomas → Thomist, Marx → Marxist と、-ist になるほうが少ないかもしれませんが、人名ではなくて、「～主義」のように、例えば、idealism なら、idealist のように、-ist (ただし、これは、adj. と n. の両方の品詞になる) になるようです。自分で、大きな辞書で確かめて下さい。

Q. 5 私は歴史学を専攻していますが、歴史を研究する上で哲学とどのように関わることが重

要だと先生は考えますか？

A. 5 不用意に答えると墓穴を掘る難しい質問ですね。哲学をやる諸君と同じようにやるしかないでしょう。ただ、史学、歴史との関係では、史学思想というジャンルがありますから、西洋のものでは、マイネッケやトレルチ、それに、ベルンハイムなどのものを読めばよいと思います
5 (もとはドイツ語ですが、日本語訳があります)。また、クロウチェの『歴史の理論と歴史』、これは、もとはイタリア語で、*Teoria e storia della Storiografia* ですから、『歴史記述の理論と歴史』というのが題で、しかも、最初に出版されたのは、ドイツ語訳でした。しかし、おすすめは、コリン
グウッドの『歴史の観念』です (R. G. Collingwood, *The Idea of History*)。これも、日本語訳があるはずですから、探してみてください。

Q. 6 現在、ソクラテス、プラトン、アリストテレスは偉大な哲学者と考えられていると思いますが、ソクラテスが死刑になった当時は良く思われていなかったのかなと思います。彼らの思想はいつ頃からすばらしいものとされはじめたのでしょうか。

A. 6 同時代人の大多数による評価と後世の評価（それも少数の専門家と大多数の人で違うことがある）が違っているのは、よくあることで、ソクラテスの同時代人の中でも、プラトンを始め、少数の人たちは高く評価していたと思います。プラトン自身はアテナイの中で最初から有力な
15 発言権のある家柄でしたし（アカデメイアという学校を組織できるくらい）、アリストテレスは、アテナイ出身ではないけれども（マケドニア出身）、アレクサンドロスの力によって、アレクサンドロスが亡くなるまでは、アテナイでも一定の評価を得ていました（リュケイオンという学校を組織した）から、そのプラトンやアリストテレスが、ソクラテスを評価していましたから、ソク
20 ラテス死後、かなり早い時期に、哲学者を自認する人たちの間では、ソクラテスの評価は高いものになっていると思います。

Q. 7 「ものを書く」ことをあまり重視していなかった人種であったにもかかわらず、多くの哲学者の言葉や思想が後世に受け継がれているのは凄いことだと思います。

Q. 7 文字にするということは、自分の考えをまとめるために有効な方法だと思っていましたが、
25 このことも捉え方を変えれば、自分で自分を守ることのできない文字に勝手な解釈を与えて、変化しない言葉を読んで安心しているだけに過ぎないのかもしれないと思いました。

Q. 7 文字で表すと間違っただけの解釈でとられるリスクが存在するというのに共感できた。だからこそ、語学力に力を入れしっかりと他人の意見を正しく解釈できるようにしたい。

Q. 7 最後先生が話された、会話でのやりとりでは相手が自分の言ったことを正しく理解できているか確認できるのに対して、本などでは間違っただけの読み手に伝わるということを書いて、なるほどなあと思いました。

A. 7 生きた言葉でのディアレクティケー（問答法）を実践し、著作を残さなかったソクラテスを直接知っていて、生きた言葉とそれがにすぎない文字の違いを十分知っているはずのプラ
35 トンが、なぜ、あの沢山の著作（多くは対話篇）を残したのか、ということは、研究するに値する問題です。ところで、この授業でもしばしば名前のあがる、ニーチェには、古典文献学者という面と、言いたいことを何でも言い放題の面（これが普通、哲学者ニーチェという場合の側面）があります。古典文献学者としてのニーチェは、バーゼルの大学で、プラトンの哲学について講義
40 する中で、この問題を取り上げています（これは大切な問題なので、少し、資料で見てください）。また、ニーチェのこととは別に、そもそも、文字で書かれた著作を読む、ということが、どういう意味をもつ行為なのか、現在のように、人が、本を読んで、それまで知らなかった情報を得る、ということが当たり前になったのは、いつからか、という問題があります。本を読んで、それまで知らなかった情報を得る、ということは、我々には当たり前のことなので、こういうことを疑ってみるのも、タウマゼイン（何故だろう、と不思議に思うこと）としての哲学の仕事です。これについては、中世のある時期に、始まったらしいことをうかがわせる文献があるので、これも
45 少し、見てみましょう（ニーチェ、アウグスティヌス、サン・ヴィクトルのフーゴーを参照）。

西洋古代哲学史 第5回 (2015.05.07.)

Q.1 ... 東洋のもので何かおすすめはありますか？(中国史学思想史(呉懷祺:編著)などよいのではないかと思います。恐らく日本語ではありませんが)

A.1 呉懷祺『中国史学思想史』1996 (ISBN:7-212-01399-4) は、確かに、現代中国語で書か
5 れているようですが、403 ページもあって、某ネットでは、税込み、送料無料で、1,330 円とは安い。誰か読んで内容を報告して下さい。

Q.2 私は哲学は頭の良い人がやる学問だと思っているのですが、この考えは合っていますか？先生はなぜ哲学を学ぼうと思ったのですか？

A.2 「頭の良い」ことの意味は、定義次第ですが、なかなか納得しなくて、いつまでも、何故
10 だろう？と追求する性格(これは、他人から見ると、いつまでもわからないと言っているので、頭が悪い、とも言える)が向いていると思います。私は、というと、「哲学を学ぼう」と思ったというより、やりたいことをやっていたら、世間から見ると、それは哲学だった、というところでしょうか(そのことには、高校生のときに気付いていました)。

Q.3 この授業では、多くの言語(ラテン、ドイツ、ギリシアなど)のテキストが出てきます
15 が、外国語習得において、話すことと読むこと、どちらが難しく重要だと考えますか？

A.3 私は、あまり、習得などと構えて考えません。聞いたり話したりは、その国に行って暮
らすのに、必要にせまられれば、なんとかなります。日本にいて、必要もないのに、聞いたり話
したりできるようになることこそ、労力の無駄以外の何ものでもないでしょう。そういうことは、
20 留学するとか、転勤するとか、行き先が決まってからでよろしい。それより、哲学史の研究には、
目の前におかれた外国語のテキストが何を言っているのか、それを読み取る能力が必要です。し
かし、読むとき(黙読するとき)も、頭の中で鳴る音が基本だと思いますが(目で見た文字を形
としてとらえ、視覚野から、左脳の39,40野で音に置き換え、それから、意味を読み取る、とい
うのが、脳内でやっている作業だという、脳科学者?の理解があります)、どちらも、手段です
から、何をやるかによって、重要度は違います。その言語を使って暮らし、授業を受け...とい
25 うことなら、まず、話す(よりも、聞く方が難しい)こと、どこで暮らしていようとも、テキ
ストを読む、ということなら、読むことが大切でしょう。本来のネイティブがもう生存していない、
古典語の場合は、読むしかありませんが...

Q.4 現在、書物を読むときには黙読をすることが、ほとんどであると思うのですが、読むと
30 いうことが音読が主流であったときと、そうでないときの書物の形式や内容というものは大きく
変化したのですか？

A.4 そういう書物の実例をコピーでもみてもらおうと思って、古代のパピュロス(パピュル
ス)の例と、中世の羊皮紙の例を見てもらったのですが...近現代の紙に印刷され、製本された
ものと違うことがわかりませんでしたか。内容は、プラトンのギリシア語のテキストそのもので、
古代、中世、近現代と変わっていません。たしかに、近現代になると、例えば、名前のしばしば
35 あがっている、ニーチェは、会ったことのない、不特定多数の読者に向けて、読者が知らないよ
うな内容を、書物として書くようになり、それが現在では一般的なことになっているのでしょう。

Q.5 ニーチェによるプラトン対話篇の研究はなかなか興味深いものでしたが、プラトンの著
作に関する研究のほとんどが不完全にしかなり得ない、という結論にしか行きつかないと思いま
した...(中略)...後世になってプラトン研究をする人達がなんだか報われなないと感じます。い
40 くらプラトンを研究しても、彼の影をひたすら辿るようなものになる気がします。ニーチェはす
ごいことを言いますね。

A.5 それでも、プラトンを研究するには、プラトンのテキストに拠るのが、今となつては、プ
ラトンに一番、近いと言えますし、プラトンの第七書簡のプラトンのことばは、少しは、プラト
ンを読むことを勇気づけてくれます。第7書簡を読み直してみして下さい(講義のプリント、p.7を
45 参照)。

Q. 6 プラトンがなぜ対話篇を書いたのか — それは弟子たちが彼との議論を思い出すためという説があるという説明があったが、やはり思いを（後世に）残すためには結局文字は必要だということを感じた。

A. 6 プラトン自身は、自分が直接書いた対話篇を、直接の弟子たちだけでなく、何百年、何千年後の人達にも読んでもらおうと思って書いたかどうかは、わかりません（プラトンは、そういうことははっきり言わない慎重さ、というか、見方によっては、いじわるさがあります）。しかし、歴史家ということになっていますが、トゥーキューディデースは、違います。

10 ὅσοι δὲ βουλήσονται τῶν τε γενομένων τὸ σαφὲς σκοπεῖν καὶ τῶν μελλόντων ποτὲ αἰθερῶν κατὰ τὸ ἀνθρώπινον τοιούτων καὶ παραπλησίων ἔσεσθαι, ὠφέλιμα κρίνειν αὐτὰ ἀρκούντως ἔξει. κτήμᾳ τε ἐς αἰεὶ μᾶλλον ἢ ἀγώνισμα ἐς τὸ παραχρήμα ἀκούειν ξύγκειται. [Thucydides, *Historiae*, I, 22, 4.]

しかし、ここに生じたことについて、また人間性に基づいて、いつか再び生起するはずの、これに類似し近似したことについて、明確に見定めようと欲する人がいつか現れて、これを有益だと判断してくれれば、それで充分であろう。これは一時の聴衆の喝采を争うためではなく、永遠の財産として書きまとめられたものである。（藤縄謙三訳）

これは明らかに、著者と同時代の読者よりも、将来、これをはじめて読む読者を想定している発言だと言えます。トゥーキューディデースのこの態度は、古代においては、例外的ですが、現代と同じ発想の、こういう書き手もいる、というのが古代ギリシアの底知れないところです。

Q. 7 「たった一つの書物しか読まない」と、知らず識らずにその方式に押し付けられる」というのは、大学に入ってから痛感することだなと思いました。

A. 7 どういうふうに痛感したのか、差し障りがなければ、教えて下さい。

Q. 8 日本人の人名の場合、先生は「～先生」と「～さん」と区別されておられますが、規準があるのですか？

A. 8 意識していないので、厳格な規準はありません。ただ、直接習ったことのある先生には、つい「～先生」を使ってしまうようです。直接習っていない先生も、直接習ったことのある先生の先生も、「～先生」を使う傾向がありそうです。

Q. 9 すでに現世にいない哲学者を研究する場合、その思想の影にしかふれることはできないのでしょうか。それとも、影から、その思想をどんどん浮き彫りにしていく作業が研究なのでしょうか。

A. 9 Q. 6 でふれたように、近現代の著作は、基本的には、これをはじめて読む人たちを讀者として想定していますから、すでに現世にいない哲学者でも（近現代以降の哲学者なら）そういう心配はいりません。いりませんが、もし、直接、本人に質問できれば、答えてくれるであろう事柄の何パーセントまでが、著作に書かれているかは、著者によって（著者の力量、意図などによっても）違うでしょうから、プラトンの場合とは違いますが、「その思想の影にしかふれることはできない」とも言えるかもしれません。

Q. 10 偏差値でその団体の技術の程度が異なるという話はなるほどなあと思いました。

A. 10 高校生のとき、兵庫県の交響楽祭（アマチュア・オケが複数参加）を聴いていて、大学のオケは、演奏の技術が、きれいに、学力の偏差値順になっていることに気がきました。そのときは、なぜかすぐにわかりませんでした。理由のひとつは、前回の授業で話したようなことがあるのだらうと思います。

Q. 11 専門分野のお話（学部生と院生の違い）、面白かったです。院って、そういうふうを選ぶのですね。知りませんでした...（後畧）...

A. 11 高校生が大学や学部等を選ぶときにも、本人がやりたいことがはっきりしていれば、大学についての情報次第で、最適な大学・学部を選ぶことができるはずなのですが...

西洋古代哲学史 第6回 (2015.05.14.)

Q.1 貴重なステファヌス版を直接見ることができて得した気分になりました。かなり綺麗にページが装飾されているのが印象的でした... (後略)

Q.1' 資料で、装飾の一種かと思ったら、そこから文が始まっていて驚いた。

5 Q.1'' 実際に1578年の本を見て、なんだか不思議な気持ちになりました。活字でも、文字が全然違って面白く、古いのに、きれいな状態で残っていてすごいなあと思いました。

Q.1''' 私たちもあまりにも分厚いと大変なので実用的な文庫本があるが、同じように考えるのはやはり必要性があったからなのかなと思った。

A.1 たしかに、現代の実用的な本に対して、高価な美術品的な側面があるかもしれません。

10 Q.2 写本ごとに、すこし表現がちがうということは面白いと思った。オリジナルをそのまま書き写せばいいのに、読みながら写し、自分なりに表現を変えてしまうところに人間性を感じ、本には、先人の思いが込められていることを改めて感じた。

A.2 故意にではないにせよ、まれに、解釈に窮する違いがあるので、困りもの、ではあります。

15 Q.3 紙が作られた年代=本が作られた年代ではないことは興味深かった。また、先生に見せていただいた本の大きさに驚いた。

A.3 Folio (全紙の二つ折本) とかですね。

Q.4 トゥーキューディデースの「これは・・・ものである」という言葉が、かつこいいと思いました... (後略)

20 A.4 しかし、同時代の人たちの前で、朗読すれば、これほど、嫌みな奴もいない、という感じで嫌われたのではないのでしょうか。

Q.5 バーネットの校訂作業については、先人の仕事の大きさ、ぶ厚さに驚きを持ちました。読解、引用等利用する時は、敬意を持って接さざる得ないと思いました。

A.5 はい、先人の仕事に敬意をもって、おしなべて読みましょう。

25 Q.6 プラトンのように、完全な写本が残っている哲学者ではなく、講義録などから再編するしかない哲学者の著作は、編集者たちの熱意が感じられて好感が持てます。

A.6 アリストテレスとヘーゲルの場合が、それに相当すると思いますが、アリストテレスのほうは、古すぎて、編集の事情がよくわかりませんが、ヘーゲルの場合は、いかがなものでしょうか。

Q.7 いつの時代ならテキストのオリジナルが、手に入りやすくなるのですか。

30 A.7 オリジナル、というのが、原著者の書いた最初の原稿のことかどうかで、話が変わってきますが、長い間、書物は高価でしたから (今でも、高価なものはある)、書物を入手できるのは、限られた人たちだけだったのが、近世、いや、近代になって、印刷物の形で、一般に入手できるようになったのではないですか。例えば、17世紀のスピノザの場合は、スピノザの生前は、出版されたのは、1冊だけ (『神学・政治論』) で、あとは、親しい人たちの間で、書き写されて回し読みされていたようです。

Q.8 ある書物がいつ書かれたのかを特定することは古いものであったり、いつ書かれたかその書物に書かれていなかったりすると難しいと思います。これまでの授業で炭素を使って年代を特定する方法があることを聞きましたが、他にはどのような方法があるのでしょうか。

40 A.8 技術的なことはわかりませんが、すでに年代がわかっているサンプルがある場合、インクなどが何でできているかを、質料分析することで、年代がわかっているサンプルと同じか、違うかである程度判断できるようです。

Q.9 自分が生きている時代の何年も前に人が生活していたと考えると不思議で、どこか気持ちの悪い感じがした。(古代のパピルス資料が発見されるなどした時)

A. 9 いいたいことは、なんとなくわかりますが... 自分が小学生のとき書いた作文とかを読むと、ギョっとするのに、似ていますか？

Q. 10 アリストテレスの講義を受けたもののノートが出てきて物議をかもしたとのことですが、それはやはりアリストテレスが本当に話したのか疑わしいという点からきているのでしょうか？ あるいは、講義を受けた側の主観が入っているのではという点なのでしょうか。

A. 10 話を整理しないと、誤解があるようです（私の話し方が適切ではなかった、ということでしょうか）。私が、言ったのは、プラトンの講義と、アリストクセノス（アリストテレスではありません）のことです。もちろん、一般的には、アリストテレスにせよ、ヘーゲルにせよ、そして、赤井のこの講義にせよ、同じ講義を受けているのに、学生によって、ノートする内容が違う、ということはあるでしょう。現に、Q. 10 を書いてくれた人には、赤井が言いたかったことが、正確には伝わっていないようですから。

閑話休題、問題はこうです。アリストクセノスは、アリストテレスの講義を聴いたという意味で、アリストテレスの弟子と言えます。そのアリストクセノスが、（プラトンを直接知っている）アリストテレスから聞いたこととして、プラトンによる「善についての講義」を聴きにきた人たちのことについて述べています（Aristoxenus, *Harm.* II）。ただし、その講義内容については、推測はできても、明確に伝えられていないので不明です。しかし、このことから、プラトンが、対話篇には記さなかった、「書かれざる教説 (agrapha dogmata)」というのがあって、それが重要だ、とする研究者たち（チュービンゲン学派）が出てきました。以前、紹介したスレザークも、この学派に属します。しかし、プラトンの講義を受けた人のノートそのものがあるわけではないので、事態としては、講義と対話篇があって、その内容が同一ではなかったとしても、対話篇に基づいて研究するしかない、と言えます。

Q. 11 プラトンのテキストが1300年の隔たりを経てから、写されたのは内容の偉大さや各時代において人々の努力もあるとは思いますが、奇跡的なことだと思いました。

A. 11 1300年の隔たり、と言っても、いきなり、1300年経って、ではなくて、その間も、何年毎かに、次々と書き写されていった、と考えるほうがありそうなことではあります。

西洋古代哲学史 第7回 (2015.05.21.)

Q.1 前回, 前々回の講義で, 書誌・書史学に興味がわきました. 参考書をお示しいただければ, うれしいです. ミレトスの思想家たちについては, 資料を熟読しておきます.

5 Q.1' 今日の講義を聞いて, ギリシア語の消音や作者がよく使う言葉によって, 時代を推定するという話を聞いて, 面白いなあと思いました.

A.1 私自身は, 書誌・書史学の参考書を読んだことも, 書誌学の授業を受けたこともありません (ご自分で探してみてください. 古代文字の歴史とかギリシア語の歴史を扱った写真集のようなものはあります). 林達夫さんが, 対談の中で, かつて, 書誌学の講義をやらされた, というの
10 を読んだことがあるくらいです. 日本の古文書や, 中国の『老子』の帛書とか竹簡, そして, 一部を紹介した, 西洋のパピュロスや羊皮紙の写本, それから, 印刷されたテキストなど, 時代や場所によって, 文献資料の物理的形態の違いや, 文字の違いなど, 一般的なことは言えても, それは, 個々のテキストを扱う職人的技術の習得とは別次元のことだと思います. 私が, 西洋哲学史の研究のために必要な技術として, そのごく一部にたずさわっているのは, 西洋古典文献学, とでもいうべき分野です.

15 この授業でも, ときどき (しばしば, かもしれない), 言及するニーチェは, 言いたい放題のだった子のようにも思えますが, 若い頃は, この西洋古典文献学をやっていたのであり, 23~4歳で, ディオゲネス・ラエルティオスの資料となったと想定される歴大なギリシア語文献を読んで, ラテン語で論文 (*参照) を書いたことが, 認められて, バーゼルの大学の先生になったのです. そういうニーチェだから, 後年, 典拠を示さずに, 言いたい放題を言っても, 何か意味がありそ
20 うに感じられるし, 実際, 何かあるのでしょうか. つまり, ニーチェは, ギリシア語やラテン語を扱う職人的な技術を身につけた上で, 言いたいことを言っている, わけです.

私は, というと, これまで, 自分が学部生, 院生として, ギリシア語のテキストを実際に読む授業の中で, 写本の記号の意味や, 写本による違いをどう扱うかななどを学んだので, 書誌学の参考書で学んだのではありません. カントを読んだときも, 『純粹理性批判』のA版とB版, それ
25 に, 校訂者による違いなどを, また, 『判断力批判』の場合は, A版, B版, C版と3つの違いなど, これも, 実際に, ドイツ語のテキストを読んでいくなかで, 知りました. テキストを, このように文献学的に扱うことは, 古代, 中世のほうが徹底していて, 近現代のテキストを読む授業では, (古代, 中世ほど必要ないからか) わりと軽く済ませる傾向があるように思います. いずれにせよ, 実際に, 原典テキストを読む演習の中に身をおいて, 理屈ではなくて, 体で覚える? こ
30 とを勧めます. 一番よい方法は, 実際に, ギリシア語からラテン語を, まず, 文法の授業で学んで, 文法が終わったらすぐ, 何か, 文献を読む授業にでて, トレーニングすることです. これは, 頭を鍛えることになるわけで, スポーツをやるのとかわりません.

Q.2 タレスたちの時代から2000年以上の時が過ぎていますが, 万物の根源に関して何か結論は出たのでしょうか?

35 A.2 物質という観点からすれば, 素粒子とかいうことになるのですが, タレスらは, 現在の私たちが考えるような意味での物質としての根源を求めていたわけではないので, その意味で, 誰もが納得する結論はでないでしょう.

Q.3 古代では, どのような形でタレスや他の哲学者の思想が広まっていったのか, 気になりました.

40 A.3 「どのような形で」の意味次第ですが, 確かに, 授業で見たように, アリストテレスは, 『形而上学』A (アルファ) 巻に, タレスの名を記しているのですが, アリストテレスの先生であるプラトンは, 幾つもある対話篇の中で, 一度も, タレスに言及していません. プラトンの弟子のアリストテレスが知っていたタレスのことをプラトンが知らなかった, とは考えにくいので, タレスは, アリストテレスにとっては, 言及する意味がある哲学者だったけれども, プラ
45 トンにとっては, 言及するに値しない, とみなされたということなのでしょう. ただ, プラトン

にとっても、アリストテレスにとっても、すでにタレースは過去の人物なので、タレースについて、語り伝えられていることか、(今は伝わっていないけれども)何かタレースについての情報を与えてくれる書物があって、それを読んでいて、ということが考えられます。

5 Q.4 プラトンの本名がアリストンだったといわれている事も驚きでしたが、そもそも、プラトンは著者集団であるとする説が衝撃的でした。日本の画家の写楽も実は画家集団であったという説と似ていると思いました。結構、このタイプの説はよくあるのだなと感じました。レポートの課題の締め切りや字数などくわしく教えていただけると幸いです。

10 Q.4' 「プラトン」というペンネームで多数の人間が集まって書いていた... という論は確かに突拍子もないなと思いましたが、おもしろいといえおもしろいと感じました。プラトンの他にも(哲学とは関係ないですが)シェークスピアもペンネームで多数の人間が書いていた... という論があったような気がします。

Q.4'' レポートのことで質問なのですが、日にちとは決まっているのですか。

15 A.4 今、考えているのは、6月中に、一度提出してもらって、添削して返却し、最終的に、8月(日時未定:成績入力期限の1週間前くらい)に提出してもらおうと思っています。6月に提出してもらうものは、書式をチェックするためなので、未完成で結構です(完成していれば、もちろん、結構ですが)。ただし、レポートは、ペンネームや、レポート執筆集団で書かないで、各自の力で書いて下さい。

Q.5 最後(に)おっしゃってた田植え体験の話ですが、先生はなぜPRされたのですか?

20 A.5 私自身が企画したわけではありませんが、生協の理事をしている関係上、企画者側の立場にいますので、参加者が集まらなると、お願いした農協や農家に迷惑がかかるからです。

Q.6 タレスは水としか高校時代学ばなかったのが今日の授業は興味深かったです。タレスは物質的な意味として水を根源的なものにしたのではなくて、もっと大きな神的なるものも含んでいます。神話的な要素があったところも興味をひきました。

25 Q.6' 私は高校時代に哲学に関する知識などを学んでおらず、今日の講義も理解を追いつけるのに精一杯だった。特に疑問だったのがアエールのことについて。議論が進めば進むほどアエールがどういうものなのかが分からなくなっていった。

Q.6'' アナクシメネスのアエールの話を聞くと、基体となる原質は、限定されたものとしないと条件をつけているにしろ、空気や水や火など何でも良いと思ったのですが...

30 A.6 タレースのいう「ヒュドール」が「水」で、アナクシマンドロスの「アペイロン」が「無限なもの(無限定なもの)」、そして、アナクシメネスの「アエール」が「空気」と一応は、訳せますが、彼らのいう「水」も「無限なもの(無限定なもの)」も「空気」も、今、私たちが、思い浮かべる、物質的なものではないだろう、ということが理解できればよいでしょう。その意味で、何でもよいのですが、タレースのいう「ヒュドール」といい、アナクシメネスの「アエール」といったのには、彼らなりに何か理由があったらうと詮索するのが、哲学史家の仕事です。

35 Q.7 テキストだけでは、プラトンやアリストテレスが何を考えていたかを理解するのは難しいということでしたが、先生は時代を自由に遡れるとしたら、どの哲学者に会いたいですか?

40 A.7 一人だけと言われると、困りますが、まず、アリストテレスに会って、失われた初期の対話篇のことを訊きたい、と思います。それから、プラトンに、イデア論をどこまで本気で考えていたのかを尋ね、次に、14世紀のオッカムに会って、「普遍」の問題について、質問したいと思います。

Q.8 質問の先生の解答にもありましたが、やはり解釈にも人の違いがよく出るのを改めて実感しました。そういう意味では、あまり資料のない哲学者を研究していた昔の人々はまず解釈自体をつくるのがたいへんだっただらうなと思った。

A.8 しかし、逆に、基づくべき文献資料が少なく、得られる情報も限られていると、それ

らに基づいて確実に言えることは、少なくなるでしょうが、分からない部分を、すでに分かっている事柄との整合性を保って推定する、ということは、文献資料が多い場合よりも、自由にできる（ただし、断定的には主張できず、こうかこしれない、と推定するだけです）、ということはありません。ソクラテス以前の哲学者たちについて、資料が少ないにもかかわらず、いつの時代も、研究が続けられている（つまり、いつの時代も、研究する人がいる、という）ことは、哲学の始まりが、どうであったか、という興味関心の他に、後の時代の哲学に関してより、前述のような推定の自由度がある、ということが理由かもしれません（学問としては厳密にやらなければなりません、夢がある、ということでしょうか）。

Q.9 プラトンの手紙の話など面白かったのですが、なりすまされて勝手に手紙を書かれるというのは迷惑な話だなあと思いました。が、「プラトンはこんなこと言わない」という人も聞いて、それも面白いと思いました。

A.9 或るテキストが主張している立場を規準にして、別のテキストが主張する立場が、規準とする立場とどれほど隔たっているか、あるいは近いかをみることで、ある程度まで、同一人物の書いたものかどうかを判断できます。ただし、その規準とする、或るテキストをどの範囲にとるか、プラトンの場合で言えば、どの対話篇の内容をプラトンの哲学の規準とするか、が問題で、どれを規準とするかによって、プラトンらしい、とか、プラトンらしくない、ということの内容が変わってきます。その上、同一人物でも、若いころと、年をとってからでは、考え方が変わっている場合があるので、違うことを主張しているからといって、直ちに、同一人物が書いたものではない、と即断することができない、という問題もあります。

Q.10 なぜ哲学者それぞれで、万物（の根源）への考えがこうも違うのか、疑問です。

A.10 逆に、なぜ同じにならなければならないのか、疑問です。誰もが認めざるを得ない実験結果や観察に基づいて主張しているのであれば、その実験や観察の範囲内で、ある程度、同じような内容になっていたかもしれませんが、そうではなくて、哲学者・探究者それぞれが、各自の（悪く言えば、勝手に、主観的な）思弁によって主張しているので、それぞれの置かれた環境の影響や、それぞれの個性が出てしまっているのではないのでしょうか。

(*参照)

以下は、2014 年度後期の「中世哲学史基礎演習（ラテン語）」の授業の進度をメモした Web ページからの転載です。備忘録のようなものなので、部分的にラテン語で書いてあったり、私的な、つぶやきのような表現になっているので、その点は、ご海容ください。

2015 年 01 月 13 日（火）Nemo venit. Legi tentamen criticum et philosophicum de origine malorum quod scripsit Schelling.

哲学史上に登場する人たちが、はじめてラテン語で論文を執筆（または公刊）した西暦（年齢）をちょっと調べてみた（年齢順に記載する。手許に刊本かコピーがあるもので、部分的にか全部を読んだことがあるものに限る。他にも調べれば、もっといろいろな人がいるだろう）。実際に書いていた時期と公刊した時期がずれていることがあるが、大体公刊の前年から公刊の年にかけて書いている。こうして並べてみると、15 歳で大学に入学した天才シェリングは別にしても、当たり前だが、結構すごいことがわかってしまった。本当か、これ。ラテン語で書くのが当たり前の 17 世紀は別に、大学等の規則によって、ラテン語で書くことになっていた、18 世紀以降 19 世紀末（いや中には、20 世紀のやつがいる（註））の *dissertatio*（学士論文）、学位論文（博士論文、または、その副論文）、*Habilitations-Schrift*（就職論文、大学教授資格取得論文）などである。タイトルは一部略記する（やたら長いがあるので）。

（註）この場合はラテン語で卒論を書いたやつより、それを全文読んで間違いを質し、審査できた先生たちのほうが偉かったというべきだろう。古代中世専門の先生はもちろん、近現代担当の先生たちも全員が、当然のようにラテン語を読めたんだからな（まあ、哲学をやっていれば当然のことだが）。ついでに、このラテン語の卒論を学士論文として大学院受験に際して提出された、

某 K 大と、もうひとつ別の某 K 大の先生たちも、これを全部読んで、口述試験の際に質問して下さったわけで、当時の先生方も偉かったと言わなければならない。

F. W. J. von Schelling, 1792(17 歳)

• de origine malorum.

5 K. Akai, 1983(23 歳)

• De doctrina Aristotelis circa Substantiam in *Categoriis*.

F. Nietzsche, 1868(24 歳)

• De Laertii Diogenis fontibus.

L. A. Feuerbach, 1828(24 歳)

10 • de ratione, una, universali, infinita.

P. Shorey, 1884(28 歳)

• de Platonis idearum doctrina atque mentis humanae notionibus commentatio.

H. Bergson, 1889(30 歳)

• Quid Aristoteles de loco senserit.

15 G. W. F. Hegel, 1801(31 歳)

• de orbitis planetarum.

I. Kant, 1755(32 歳)

• Meditationum quarundam de igne succincta delineatio.

• Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio.

20 A. Schopenhauer, 1830(42 歳)

• Theoria Colorum Physiologica.

ただし、ドイツ語版 Ueber das Sehn und die Farben は、1816(28 歳).

西洋古代哲学史 第8回 (2015.06.04.)

Q. 1 理解とは誤解の総体だと村上春樹が言っていました。最近、個人的に"関係性の錯誤"というか、先生の言葉でいうと、"ズレ"といったもののことをずっと考えていたので、今日の授業は収穫でした（たぶん、先生の狙ったものとは別のものを収穫してしまいましたが...）ありがとうございます。

Q. 1' 今日の認識のズレの話、興味深く聞きました。言っている人が伝えたいことと受け手が受け取ったことは必ずしも一致しない・・・なるほどなあと思いました。

A. 1 村上春樹は、私が卒業した同じ高校の十年以上先輩ですが、同じようなことを言っていますか（ほとんど、読んだことがないので）。誤解やズレということが歴史をつくる、みたいなことは、探せば、他にも言っている人がいるでしょう。中世哲学史で用いられる諸概念の知識がないと理解するのは難しいかもしれませんが、慶応の山内志朗先生が『「誤読」の哲学 ドゥルーズ、フーコーから中世哲学』（2013年、青土社）という本を書いています。

Q. 2 ムーサが女神のことである、とありましたが、なぜわざわざムーサがヘシオドスに語りかけるという形をとったのかなと思いました。

A. 2 ムーサ（複数形は、ムーサイ）は、学芸（音楽、文芸など、現在の自然科学も含む）を司る女神たちなので、古代ギリシアの古いスタイルとして、女神が語りかけてくれたことを人間が述べる、というのがあり、現代の私たちには、なじみがありませんが、彼らには普通のことだったようです。断片的にしか残っていない、パルメニデスの哲学的詩も、冒頭は、女神がパルメニデスを導いて、この世界の真実を見せてくれた、という設定で始まっています。

Q. 3 先生の哲学の原点は何でしょうか。教えて下さると幸いです。

A. 3 何を訊かれているのか、漠然としかわかりませんので、何を答えればよいのかわかりません。ですから、「先生の哲学の原点は何か？」をもっとパラフレーズして説明して下さい。

自分が不思議に思うことを学問的に追求しようとする、それは哲学だった（あるいは、やりたいことをしていたら、それは哲学だった）、とか、高二のときに、パリで森有正さんに会って話をしたとか（『人文学へのいざない』初版または第3版を読んだことがありますか）、言ってみても、何か違う気がします。

Q. 4 現代においては哲学する（定義は別として）際に神を考察することは、古代の時とどのような差異があるのでしょうか。時代が進むにつれて技術は向上し、知識も増えていっているが確実に非科学的なことへの見方は難しくなったのではないか。そもそも神等のように宗教等が絡むことに哲学からアプローチすることにはどんな意義があるのか、言及すべきなんでしょうか。

音楽やってる身としてはたまに音楽関係の話が出るのはうれしいです。

A. 4 音楽って何やっているんですか？

さて、本題です。「神等のように宗教等が絡む」ということですが、西洋哲学史の研究を行なうときには、研究する自分が信仰をもつかどうかに関係なく、研究対象となる当時の人々の「宗教等が絡む神等」を考察対象にしなければならないことが多いでしょうが、「宗教」とは言えない「神」「神々」「神的なもの」も哲学者は扱います。ヨーロッパの言葉の訳語としての「神」というのが、そもそも、誤解と忌避を引き起こしている、という感じがしますが、もともと、それら（「神」「神々」「神的なもの」）に関心のない人は、言及しなくて結構ですけれども、そういう人が哲学だと思ってやっていることは、本来の哲学とは別の、個別学、領域学にすぎないので、はっきり言って、つまらない（面白くない）、というか、哲学ではないので、私は関心がありません。

なお、日本語の「科学」とか「科学的」という言葉には、フランス語と英語の science やドイツ語の Wissenschaft, それに、意味的にそれらのもとになっている、ラテン語の scientia やギリシア語の ἐπιστήμη とは違って、意味が偏向して用いられている場合が多いので、この語を使用している人に意味を確認した上でないと、有意味な議論はできません。

ところで、例えば、「宗教哲学」という学問がありますが、これは、形容矛盾ですか？ 波多野精一は、『宗教哲学』の序で、

本書において著者は、宗教的体験において主体の対手をなすものを言表わすため、便宜上「神」という語を用いた。(波多野精一『宗教哲学序論・宗教哲学』, p. 169, 岩波文庫)

5 と言っています。また、安倍能成が今道友信氏に与えたアドバイスとして、次の言葉が心に残っていると言っています。

哲学を勉強するのなら、次の二つのことをよく心に残しておきなさい。思想は国家で終わるものではない。また、偉大な哲学者は必ず宗教的な憧れを持ち続けている。この二つを君は忘れないように。(今道友信『知の光を求めて』, p. 24, 中央公論社)

10 さらに、難解なので、私は敬して遠ざけていますが(こっそり読んではいます)、20世紀の哲学者、ハイデッガーも、死後、『シュピーゲル』誌に発表された対話の中で、

Nur noch ein Gott kann uns retten. [*Der Spiegel*, 31, Mai 1976, S. 193, S. 209.]

かろうじて神なる者だけが我々を救い出し得る。

という表題のもとに、我々が、有 (Seyn, Sein) の忘却に窮して、有を探究し続けたはてに、「最後の神 (der letzte Gott)」が立ち寄る、ということを語っています。しかも、この「最後の神」は、
15 第一原因とか自己原因という「哲学者の神」でもなく、キリスト教信仰のうちにおけるような万物を「創造する全能な神」でもなく、「最高善」や「価値」としてとらえられた「神」でもないとい
います。また、「最後の神」は、「一神論 (Monotheismus), 汎神論 (Pantheismus), 無神論 (Atheismus)」
20 というような算定的な限定の外にたつ、と言われます。その上、「最後の神が立ち寄る」といつ
ても、いつ立ち寄るのか、人間にははかり知れない、と言います。人間にできることは、最後の神
が、いつ立ち寄ってもよいように、つねに準備をしておくことだけだ、というのです。この「最
後の神」が、宗教が絡む「神」でないのは、明らかでしょう。そして、これを非科学的といって、
無視するのは、自由ですが、宗教が絡む「神」でないけれども、「神」としか言いようのないもの
を、何とか扱おうとするのが、哲学なのです。

25 また、A. N. ホワイトヘッドといえば、ラッセルとの共著『プリンキピア・マテマティカ』が有名ですが、彼の哲学の主著、『過程と実在 (*Process and Reality*)』の最終章は、「神と世界」が論じ
られています(この神はキリスト教の神とは全く違います)。この優れた、数学者、論理学者、物
理学者でもある、ホワイトヘッドが、どのように、そして、なぜ、神を論じるのか、不思議に思っ
て、私は、ここ数年、より分かりやすい講演・講義がもとになっている『観念の冒険』を扱って、
30 授業をしています(後期の「科学哲学・科学思想史」)。

なお、バリバリの論理学、数学の研究者で、数理神学というのをやっている人もいます。これも、非科学的ですか？ 先にも言及しましたが、「神」と「科学(的)」という日本語の意味を確認しないと有効な議論はできそうにないですね。

35 Q. 5 問題の答え(ママ、答)を、後の人たちが発展できるようにオープンにするというのは、面白いと思いました。

A. 5 枠組みそのもの、学そのものの拒否や否定ではなくて、修正の余地のある仕方での問題設定、問題の提出と、その解答、という点に注目しているのは、(今風に言うと、哲学史家としての) アリストテレスの優れた見方です。

Q. 6 自然が生きているという表現が面白かった。

40 A. 6 「生ける自然」が意味をもつのは、これに対して、いわば、「死せる自然」が普通に受け入れられている場合です。「死せる自然」という見方は、中世よりもむしろ、近世のキリスト教の影響によると思います。

Q.7 生物-無生物の区別が問題になっていると触れられていましたが、先生はその間に明確な区別があると思いますか。僕は法律的に定義される「死」や生物学・医学的に定義される「死」というのは時代によって変化するし、常に複数存在するような気がしています。

A.7 生物か（あるいは、生きているか）どうか、ということは、現実の問題に対処するために、人為的に線を引いているだけです（個体が個体を生むことができる、とか）、時代によらなくとも、同時に、例えば、国によって、異なる定義があるのは当然でしょう（abortionの問題に関して、この場合は、「生物」であると同時に「人格」あるいは「人」であるかどうかは問題ですが、日本は、ある意味で、曖昧ですが、カトリックでは、きびしく定義するので、現実的に困ったことが起こるのは周知の通りです）。哲学史を少し知っていれば、例えば、ライブニッツでは、私たちが考えるもの（物体、無生物）から、知性的な存在（神にまでいたる）まで、すべて同じで、ものも表象 (perception) をもち、私たちがいう、生物-無生物の区別は、その程度の違いにすぎませんから、生物-無生物の区別はありません、とも言えるし、すべては、もの、ともいえるし、すべては、生物、とも言えます（ライブニッツの用語では言わないでしょうが）。また、バルクソンでは、すべての存在は、イマージュ (image) ですから、ここでも、私たちがいう、生物-無生物の区別は問題になりません。ホワイトヘッドの「現実的存在 (actual entity)」にも、これらに通じるどころがあると思います。ついでに、その時代、社会環境に制約されて、過去の哲学者が行なった哲学的考察を、生物学者が、哲学に配慮して論述した、モノー（渡辺格・村上光彦訳）『偶然と必然』(J. Monod, *Le hasard et la nécessité*, 1971) を読んでいなければ、読んでみてください。

Q.8 本日の講義（ママ、講義）は、詩人が世界にある秩序を語り、哲学者が論ずるための土台が作られるところからはじまって、時代を経て、今「あるだろうけれども言葉をまだ与えられていないもの」について考えさせられて、たいへんでした。

A.8 申し訳ございませんでした。しかし、「あるだろうけれども言葉をまだ与えられていないもの」は、いつまでも、「言葉を与えられない」ままかもしれません。議論を進めるために、あるいは、探究を継続するために、やむなく、暫定的にせよ、それを、「神的なもの ($\tau\acute{o}\ \theta\epsilon\acute{\iota}\omicron\nu$)」と言ったとたん、「非科学的だ」と言って、思考を停止する輩が多いので、分からないもの・ことを、わからないままに、持続して持ち続けることができ、早急に、答を欲しがらない態度が、学としての哲学には必要です。

西洋古代哲学史 第9回 (2015.06.11.)

Corrigenda: 第7回のコメントのA.3(p. 13, l. 42)で、「プラトンは、幾つもある対話篇の中で、一度も、タレスに言及していません」と書きましたが、哲学者としてのタレスではなくて、天文学者としてのタレスに言及している箇所があるのを思い出しました。それは、『テアイテトス』
5 (*Theaetetus*, 174A)にあります。天体(星)の観測に夢中になって、上ばかり眺めていて、溝に落ちたところを、トラキア出の婢に、「あなたさまは熱心に天のことを知ろうとなさいますが、ご自分の面前のことや足先のことにはお気づきにならないのですか」(田中美知太郎訳)とひやかされる話です。

さらに、授業のプリントで、タレス(タレース)に関する記述の中で、琥珀について、p. 11, l.
10 485に、「磁力」とありますが、「(静電気による)引きつける力」と訂正してください。指摘して下さった方、ありがとうございます。

Q.1 コメントの紹介を短縮するという話については反対です。確かに授業時間は圧迫されてしましますが、先生との「対話」の時間が減ってしまうことは、授業時間が減ってしまうことよりも、もっと残念なことのようには私は思います。

15 A.1 なるべくコメントの時間を確保するように努めます。

Q.2 Xenophanesの詩は日本語訳など出ていないのでしょうか。面白そうなので探してみます。

A.2 何種類も出ていると思います(廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』, 講談社学術文庫, 単行本もあり; 内山勝利編『ソクラテス以前哲学者断片集』5冊+別冊, 岩波書店, これは、ディールス, クランツの邦訳; カーク, レイヴン, スコフィールド『ソクラテス以前の哲学者』←これは
20 は, 邦訳が手許にないので, 大体の書名, など)。しかし, クセノパネス(古典ギリシア語の発音を片仮名にすると, こうなります。クセノファネスは, 古典ギリシア語の発音としては, 間違いです)を読むなら, 何故, ギリシア語を学んで, ギリシア語で読もうとしないのですか。ショーペンハウアーが, 哲学史についていつていたことを覚えていませんか。ついでに, 晩年の西田幾多郎が, 今道友信さんに言ったことばを添えておきますので, よく考えて下さい。「アリストテレスの
25 『形而上学』を読むんなら, どんなに能率が悪くても, 今している通りに原典で読みなさい・・・一体に日本の学者は古典をやりたいがらない。それがスケールを小さくする・・・」(今道友信『知の光を求めて』, 中央公論新社, 2000年, p. 51.)

Q.3 ピュタゴラスのオリムピックの例えは面白かったです... (後略)...

Q.3' オリムピックの観客を知を求めるとしてピュタゴラスの思想はかなり新鮮でした...
30 (中略)... また, 教団から追放されると教団に墓がたてられるというのはかなり悪趣味だなと感じます。物理的な死よりも社会的な死のほうが苦痛なはずです。

A.3 まさに, その苦痛である, 社会的な死(教団にとっては死んだも同然の扱い)を与えることが, 本当は生きているのに, 墓をたてる目的であったろうと思われます。問題は, このような扱いをされる理由ですが, それは, 教団の内部にいて一定の修行や学習の課程を修めた人たちだけが
35 知っている事柄(教団の秘密? 奥義?)を, 教団の外に漏らした, というのが最大の理由であったと考えられます。これに対して, どういう処分をするかという点で, ピュタゴラスの教団と, プラトンのアカデメイアに属していた人たちの間では, 考え方に違いがあったらしいことを, トーマス・A. スレザーク(内山勝利, 丸橋裕, 角谷博訳)『プラトンを読むために』(岩波書店, 2002年) [原典は, Thomas A. Szlezák, *Platon lesen*, Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog, 1993.]
40 の, 第26章「私秘教説主義と守秘主義との区別」が扱っていて, たいへん示唆的です。

Q.4 私は今卒業論文を書こうとしているのですが, 先生が卒論のテーマや題目などどのようにして決めたのですか?

A.4 授業で読まれているテキストとは別に, 中世の大学では, アリストテレスの論理学書(『範疇論』『命題論』『分析論前書』『分析論後書』『トピカ』『詭弁論駁論』)が, まず, 学ばれていたこと
45 を知って, 自分でもそれを追体験しようと, 学部2年のときに, まず, 『範疇論』から読み始め

たら、そこに書かれていた実体（ウーシア）や内属（ユパルクシス）、述語づけ（カタ〜・レゲタスタイ）などが気になって、それは卒論になってしまいました（この卒論は、赤井の Web サイトで全文読むことができます）。

5 Q.5 クセノファネス（ママ、クセノパネス）のそれでもあきらめない姿勢は哲学を学んでいる身としては見ならうべきものだと思います...（後略）...

A.5 ハゲドウ（激しく同意）です。

Q.6 確かに「神」という語があると宗教的な感じがしてすこし遠ざけてしまうかなとも思いました。「神」=神的なもの、超越者として、今後考えていきたいと思います。

10 Q.6' 大学での講義でスピノザの思想にふれて、自分の中で「しがらみ」なく「神」について思索できるようになりました。自分の中ではまだ「神」はなにものでもありませんが、大きな興味の対象ではあります。

Q.6''・・・「自然科学」（ママ、「自然学」？）とか「神」とか、訳したからと言って全てが伝えられるわけではないので難しいなあと思いました。

15 A.6 暫定的に、未知のもの x として、それが、満たす条件がどういうことであるかを、少しずつ明らかにしていく、という姿勢（態度）が必要で、何かわからないから、考えない、という姿勢では、扱えないでしょうね。どういう態度をとるかは、その人の自由ですが、しかし、それが、その人の哲学的に思索の奥行きを示しているという感じがします。

Q.7 論文を論評する際に注意すべきことはありますか？

20 Q.7' まだまだ先のことだが、この授業で最後に書くレポートがこの自分に本当に書けるのか心配である。テーマ設定においてもセンスを問われているので、歴史を専攻している自分からすれば、難題に感じるが、レポートを書く中で、多くの哲学者を学ぶことで、よい学びの機会と捉えたい。

25 A.7 言っていることに、論理的整合性があるか、とか、根拠が説得力があるか、とか、実際に書かれたレポートを前にしないと、抽象的な言い方しかできないので、そう構えずに、まずは、自分がこうだ、と思うように書いてみて下さい。

Q.8 コメントの中で出てきた、動物・植物の「権利」の話はとても面白いと思いました。哲学的に動物や植物の権利について論じているものを他にも教えてくれるとありがたいです。

30 A.8 今、手許に具体的に資料がありませんが、応用倫理とか応用哲学？ と称する分野では、人間以外の動物の「権利」を扱った研究がありますので、自分で調べてみて下さい。現代の問題を扱ったものと、哲学的に、ギリシアではこうだった、というようなタイプのものがあると

西洋古代哲学史 第 10 回 (2015.06.18.)

Q.1 ヘラクレイトスですが、何を言っているのか分からないのに、哲学史的に重要視されているのはなぜなのでしょう。

A.1 正確には、難解、晦渋で理解するのが困難だが、不可能ではないので、何らかの解釈ができるからです。「何を言っているのか分からない」という表現は、文字通りには、意味不明ということですが、実際には、困難だが、何らかの意味を読み取ることができる、ということです。

Q.2 神が人の姿であらわされることをかねてから傲慢であるとかんじていたので、「神は死すべき者どもに少しも似ていない」という考えはりかいできるものでした。

Q.2' クセノパネスの牛や馬をひきあいに出して当時考えられていた「神」への否定はとても上手いと感じました。確かに人間の考える神は人間的な性格あるいは特徴をもつことが多いと思います。日本人は、というより、私は、神=宗教とすぐに結びつけ遠ざけすぎなのではないかと思うこともあります。一旦調べてしっかり知った上で判断しなければいけないのではないかと思います。

Q.2'' 宗教学の授業でキリストが白人なのは、白人の視点で描いたからだと聞きました。動物が動物に似た神々を描くだろうという話は面白いと思いました。確かにクセノパネスが言うように人間が生まれるずっと前から存在していて、全知全能の神の姿が人間の姿であるはずはないなと思いました。全てが神であるという考え方は支持できると思いました。

Q.2''' 神の観念に関する批判は興味深かったです。人間にしる、動物にしる、自分に似たような姿の神々を想像する、ある意味では思考力の限界、思考の狭さみたいなものを表している気がする。

Q.2'''' 今日講義を聞いて、神という存在は、はっきりと目に見えて、分かる存在ではないのに、現在まで存在が信じられていて、信仰されていて、不思議だなあと感じました。又、日本は多神教で、一人の神様を信仰することがないので、神という存在をちょっと理解しづらいなあと感じました。

A.2 哲学史の研究をする上では、文献にあらわれる「神」「神々」「神的なもの」を、私たちは、探究の対象として考え、この著者は、何のことを「神」等と言っているのだろう、と私たち自身が想定する「神」等とは切り離して考察する必要がある、ということをおっしゃいました。しかし、授業で、「神」等に言及すると、この研究態度をとれない学生諸君からは、必ず、「神」等に対する、拒絶反応があるものですが、(ちょっと文脈、というか、話のスケールが違うのですが) 上山春平氏の次の言葉を思い出してしまいます。

長い歴史の過程において蓄積された知識の体系は、たしかに貴重な文明の遺産ではあるが、たとえば、古代ギリシア以来の西洋哲学、ヴェーダ以来のインド哲学、春秋戦国以来の中国哲学等は、地球規模における人類の自由な思想交流の必要が増大しつつある今日の状況下においては、かつてそれぞれの分布地域における思想交流を促進する役目を果たしていたばあいとは逆に、強大な偏見の体系として思想交流の阻止要因に転化しつつあるのではないかと疑われる。[上山春平『日本の思想 土着と欧化の系譜』同時代ライブラリー 342, 岩波書店, 1998 年, p. 4.]

この場合、私たちが、西洋哲学史を研究する際、そこに現れる「神」「神々」「神的なもの」が、ギリシア神話的なものか、ユダヤ・キリスト教のものか、それらとは同じではない、哲学的な「絶対者」や「超越者」のことなのか、それら以外なのか、なじみがなく、違和感(異)があつて、理解することを拒否する態度をとるとすれば、ギリシア以来の西洋の哲学が、「強大な偏見の体系として思想交流の阻止要因」になっているということなのでしょう。

しかし、そのギリシア以来の西洋の哲学の中にも、デモクリトス、エピクロスらの原子論の立場

を表明している、紀元前一世紀のルクレティウスは、『事物の本性について (*de rerum natura*)』で、こう言っています。

cetera quae fieri in terris caeloque tuentur
 mortales, pavidis cum pendent mentibu' saepe,
 5 et faciunt animos humilis formidine divom
 depressosque premunt ad terram propterea quod
 ignorantia causarum conferre deorum
 cogit ad imperium res et concedere regnum. [Lucertius, *de rerum natura*, VI. 50 – 55]

地上および天上において人々が起こるのを見るその他のものが

10 しばしば怖れを抱く心の上に望むとき、
 神々への恐怖で人の心を低く垂れさせ
 地面におしつけてしまう。なぜなら、
 その原因への無知が、万物を神々の支配にゆだね
 その統治を認めさすのだから。[藤澤令夫訳]

15 つまり、実際には存在せず、人々の想像の産物でしかない「神、神々」への恐怖心を、時の権力者が利用して、無知な人々を支配する手段に利用しているのだ、と暴いているのです。紀元前に、すでにこういう人もいた、ということです。

Q. 3 神がそのまま宇宙であるというのは、神が宇宙を「創造」したの、そもそも神自体が宇宙空間であり、その中の一部である地球に住む私たちも神の一部であるという考えなのですか？

20 A. 3 最初の文が、「・・・したの」と「の」の後がスペースで終わっているのが、疑問文なのか、つぶやきなのか、わからないのですが、少なくとも、「神が宇宙を「創造」と言っているのが、西欧では、キリスト教成立以前のことを問題にすると、つまり、古代ギリシアのことを問題にするときには（ユダヤ教はもっと古いので別途議論する必要があります）、注意が必要です。古代ギリシアでは、哲学者によって、多少、違いがありますが、基本的に、宇宙は創造主（神）に
 25 よって創造されたものではなくて、始めからあるものか、自然に？ 生じてきたものです。

前回、Q. 6' で、スピノザの名前が出ていましたが、神=自然、ということが、しばしば、スピノザの汎神論 (pantheism) について言われますが、キリスト教を前提にすると、もともと、被造物としての人間（そして、物体としての自然も）と、創造主としての神は、区別されますので、自然と人間の関係をどう捉えるか（自然の中に人間を含めるかどうか）によって、話が違ってきます。

30 単に、「汎神論」と言っても、実は、（まったく違う、と言ってよいほど）いろいろなタイプの「汎神論」があります。以下は、網羅的ではありませんが、気になる、「汎神論」のタイプとしては、以下のようなものがあります（分類の仕方によって、他にも、あるだろうと思います）。いずれにせよ、原則として、キリスト教は、どんなタイプの「汎神論」とも相容れないので、これらを否定するはずで

35 ひとつは、「無宇宙論的汎神論」と言われるもので、神だけが絶対的存在であり、宇宙や自然はその幻影にすぎず、本当は存在しない（非実在）、と考えます。（正確な議論はできませんが）ウパニシャッドのような考え方です。これは、創造論を伴うキリスト教とは関係ありません。

また、「内在論的汎神論」と言われるものは、神が宇宙（自然）に内在していて、宇宙（自然）の全体、すべてに力が及んでいる、と考えます。神が宇宙（自然）に内在すると言っても、何か、
 40 特定の自然物と同じように、どこか、特定できる場所にいる（ある、存在する）、というのではなくて、あらゆるところに遍在する、と考えるので、宇宙（自然）の全体、すべてに力が及んでい

る、ということが重要です。ソクラテス以前の哲学者たちについて、「汎神論」というときは、このタイプの「汎神論」がそれにあたります。ところで、宇宙（自然）の全体、すべてに力が及んでいる、という、その点では、結果的として、神が宇宙（自然）の外に（超越的に）存在して、宇宙（自然）の全体、すべてに力を及ぼしている場合と変わりません。アリストテレスが、『形而上学』
5 12巻で言っている、いわゆる「不動の動者」としての神、「愛されるものとして（他のものを）動かす」神は、これに近いでしょう。これも、また、直接的には、創造論を伴うキリスト教とは関係ありません。が、キリスト教成立以降も、この、神が宇宙（自然）に「内在」する、と解されるタイプの汎神論を唱える人たちが出て、物議を醸（かも）します。

このように、神が宇宙（自然）に「内在」する、というのに対して、逆に、神の中に、宇宙（自然）がある、ということと言うのは、神だけが一元的にある、という意味で、「一元論的汎神論」と言われます。そしてさらに、その神の中の宇宙（自然）は、変化しない、とする考え方と、変化するが、神はその影響を受けない、とか、考え方の違いがでてきます。これも、キリスト教は、本来、関係なくて、この考えを否定するはずですが、中世や近世には、このタイプの考えをする人が散見されます（さきに、物議を醸（かも）します、と言ったのが、これにあたります）。

そして、上述のような、神が宇宙（自然）に「内在」するのか、それとも、神が宇宙（自然）を「超越」しているのか、という問題に対して、そのどちらでもなくて、神と世界（宇宙、自然）は、相即的であって、乱暴に言うと、一つの実在の二つの名前に過ぎない、という、いわば、「相即的汎神論」が、スピノザの、神=自然、という汎神論でしょう。

と、他にも、汎神論のタイプはあるでしょうが、Q.3の後半は、神が宇宙・自然に「内在」するのでもなく、宇宙・自然が神に内在するのでもなく、まったく一致している、として、宇宙・自然の一部に人間も含まれる、と考えると、人間は、神の一部なのか、という問いですから、その通りである、と答えられます。そして、このことは、創造論を前提とするキリスト教とは関係のない次元では、まったく問題なく、そのように考えられていました。

Q.4 神を説明するためのうまい言葉が存在しないせいで「球形である」というよくわからない（しかもそれさえも正確でない）言葉におちついてしまって悶々としている哲学者たちの姿が想像されてなんだかほほえましいような、やりきれないような気持ちになりました。切ないです。楽しいです。

A.4 「悶々としている哲学者」という表現には、はじめて接しましたが、なんだか、かわいいと思いました（哲学をしていれば、若くても、女性でもよいはずですが、クセノパネスとか、パ
30 ルメニデスは、いい年のおじさんかおじいさん、というイメージがあるので）。「神」が何か、よりも、この表現のほうが不思議です。

Q.5 シャボン玉はまだ飛ばしておられますか？

A.5 飛ばしています。いつも、携帯用のものをかばん（ふくろか？）に入れてあります。

Q.6 クセノパネスによる神の anthropomorphic に対する批判の方法が、通用する人には通用するが・・・という事実はほんとうにそうだなと、思います。→「テレビもないし・・・」というよりも「ネットやSNSもないし・・・」のほうが現在では、説得力があるかもしれません。

A.6 そうですね。私は、大学に入って下宿し始めてから、20年くらいは、テレビなしで過ごしました。東広島に来て何年目かに、留学する学生がテレビをあずかってくれ、とテレビを置いて行ったので、また、見るようになり、研究室のパソコンにもテレビチューナを入れ（3台）、同
40 時に、3つの異なる番組を見られるようになりましたが、地デジ化で、再び、テレビなし、になりました。

Q.7 先日、中間レポートの課題を少し読んでみたが、テーマ設定をどうすればよいか、今一つ分からない。テーマ設定する際に気をつけたらいいことあるいはコツなどあれば教えてください。今日の授業は先生の卒論の話なども聞いて面白かった。

45 Q.7' 予備レポート課題の pdf ファイルは見る事ができたのですが、先週書かれていた URL

にはアクセスできませんでした。申し訳ありませんが、もう一度 URL を教えていただけませんか (私が URL を写し間違えていたかもしれないので)。

A. 7 URL は、授業でもう一度お知らせしましょう。レポートの課題も、卒論の題目も、そして、修論、博論のテーマも、また、研究者が書く、個々の論文のテーマも、哲学の場合は、自分が心から疑問をもち、関心のあることがらを問題として取り上げないと、書く人にとっても、読む人にとっても意味がありません。赤井の論文を読んでみて、わからなかったことば、表現、なんでもよく、例えば、「問答法」とは何か？ この論文で言われている限りでは、これこれだが、別に、自分で調べてみた所 (ネットでも、哲学史の本でも、哲学辞典の類いでも) では、こういうことだったが、この違いは、どうして生じているのだろうか？ という疑問が湧けば、それがテーマになるでしょう。しかし、何も疑問がわかかなければ、無理にテーマを設定しても、仕方ありません。資料を読んでみて、何か自分がひっかかることはないか、考えてみて下さい。

と、ここまで書いてきて思うのは、こういうことです。哲学 (倫理ではなくて) をやっている連中の中にも、本人が、本当に関心をもってやっているのなら話は別ですが (これは、本人にしかわからない)、もう 20 世紀末からずっと、大学の哲学の教員として就職するには、応用倫理 (生命倫理、情報倫理等) の業績があり、授業も担当できることを条件にする場合が多いので、もともとの自分の専門が、哲学史的な、文献学的な研究をしていても、何か、応用倫理に関わる論文や本を書いたりすることがよくあります。しかし、20 世紀の半ば過ぎまでは、めったに論文は書かない、本も書かない、翻訳も稀にやればよいほう、という大先生もいました。社会からの求めに応じて、研究分野を変更する (拡大する?) 人も、その能力があれば、そういう人もいる必要があるのですが、それに対して、自分が本当に、関心をもって問題だと思ふことがらを追求して、ある程度、学問的な水準を保って、公表するに値する、と判断できることだけを公表する (カントの 10 年間の沈黙、ラヴェッソンのように、論文の提出を求められないかぎり、自分からは書かない態度、『論理哲学論考』だけのヴィトゲンシュタインの場合や、哲学ではないけれども、ソシュールのように、生前は、著書がない例など) ということが、許容されないと、単なる資源の無駄使いでしかない、論文や著書が氾濫して (中には、そうではないものも、もちろん、ありますが)、かえって、これから学ぼうとする学生諸君や社会の人たちに、害悪を及ぼしているように思うのは、私だけでしょうか。publish or perish と言いますが、こういう手合いは、時間のテストによって、publish and perish だと思います。みなさんは、そういう論文や本に騙されないように、できるでだけ、オリジナル (原典) に基づいて判断する力を養ってください。哲学史上でも、こういうことは問題にされているので (ショーペンハウアーが一番鋭く指摘していますが)、その例を一つ紹介しておくと、スピノザの友人だった、ヤーリヒ・イエレスが序文を書いたとされている、スピノザの『神・人間及び人間の幸福に関する短論文 (*Korte Verhandeling van God, de Mensch en des zelfs Welstand*)』への序言にこういうのがあります。最初の 'daarvan' の 'daar' は、直前で言われている、'Waarheid en Deugd' (真理と徳) を指しています。

35 die daarvan zoo breed opgeven, en hun drek, en vuyligheid aan de eenvoudige voor Amber de grys in de vuyst duwen [fortasse, Jarig Jelles, in *Spinoza Opera I*, C. Gebhardt, p. 11]

これは、17 世紀のオランダ語なので、現代オランダ語辞典を引くと、ちょっと綴りが違いますが (vuyligheid → vuiligheid/vuijligheid; grys → grijs; vuyst → vuyjst)、オランダ語を勉強した人にはわかるでしょう。ちょっと日本語に訳すのはばかられるので、意味は、授業で話しましょう。でも、こんなにまで、言われる書物が公刊されている、ということです。

Q. 8 資料に所々書き込みがあつてこういう風を読むのかと再度驚きましたが、所々しおりのようなものがはさまっていました。紙を切ったものとふせん... これらに意味はありますか？ ここは特に大事であると確認するためのしるしですか？

A. 8 ポストイットがなかったの、ありあわせの紙を切って葉のかわりにしているんだと思います。

西洋古代哲学史 第 11 回 (2015.06.25.)

Q.1 ログスについて、今までは単に用語として理解していただけだったが、今日の授業を聞いて、本質を理解することができた。

A.1 ギリシア語のログスは、本当に、多義的なので、私にも、その本質を教えていただきたいと思えます。

Q.2 相反する言葉が一気に同時につかわれていて、少し難しかったです。

「ヘラクレイトスにとって、生成の方向は一方向ではなく回帰的であった」というのは、Fr. 76 や Fr. 36 を読んだらとても理解できましたし、身近な自然でもある現象なので納得できました。

ヘラクレイトスのことばは難しいけれど、読み取ろうとする作業ができるので、そこは楽しいです。(難しいけど)

すごく漠然としていることばかりのように感じるのですが、ヘラクレイトスの頭の中はクリアだったのでしょうか。

A.2 ですから、最初に紹介したように (p. 19), 後世の人たちから、「謎をかける人」とか「暗い人 (何言ってるか分からない人)」とか、言われているのです。「頭の中はクリア」ということを、私たちが論理的整合的に理解できる、という意味に解すると、それはわかりません。しかし、ヘラクレイトスに限らず、古典的な文献を読解しようとするときには、はじめから、意味不明のたわごとを言っている、とみなして、相手にしなければ、それだけのことで、私たちは何も得るところがありませんが、しかし、一読しただけでは判然とわからないけれども、もし、何か意味のあることを言っているとすれば、と仮定して、外見上、矛盾するような表現を、整合的に理解することはできないか、明言されていないけれども、当時の人たちには自明だった前提がかくれているのではないか、とか、私たちの側に、テキストを理解するための知識が欠けているのではないか、と、思っ、理解する可能性を探る態度が、文献学 (哲学史研究) には必要です。そして、最終的には、整合的な理解に至らなかったとしても、その過程で、私たちがあれこれ考え、探究した作業自体が、広い意味で、哲学をしていること (過去の哲学者、この場合は、ヘラクレイトスと対話していること) になるのです。

Q.3 リュラとはなんでしょう？

ヘラクレイトスの流転思想の川の記述を読んだとき方丈記の「行く川の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらず」という一文を思い出しました。

A.3 リュラは、撥弦楽器です。

なお、鴨長明の『方丈記』の冒頭は、大福光寺本では、

ユク河ノナカレハタエスシテシカモ、トノ水ニアラス

とあり、この箇所について、『十訓抄』の「第九 可停懇望事」の中に、

方丈記とて、仮名にて書き置けるものを見れば、始めの詞に、「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」とあるこそ、

川関水以成川、水滔々而日度。

世関人而為世、人冉冉而行暮。

といふ文を書けるよとおぼえて、いと哀れなれ。

とあります。しかし、これは、さらに、『文選』巻八にある、陸士衡の「歎逝賦竝序」に、

川関水以成川、水滔滔而日度。

世関人而為世、人冉冉而行暮。

とあるので、ここから、取ったのだろう、と遡って行くことができるわけですが、これは、『方丈記』の著者や、『方丈記』に言及している『十訓抄』の著者の読書経験を、追体験していることになり、鴨長明の独自性もわかるようになるでしょう。

ヘラクレイトスのように、ソクラテス以前の哲学者たちの場合は、彼ら自身の文献資料（断片）が一番古い部類に属するので、文献学的は、あまり遡ることはできませんが、プラトンやアリストテレスくらいになると、彼ら以前の文献が一定量あるので、プラトンやアリストテレスを理解するためには、プラトンやアリストテレスが書いたものだけを読んでいては不十分で、彼ら以前（同時代のもの）のものを読む必要があります。これが、近現代の哲学者ならば、当然のことで、ヘーゲルなら、カントなどドイツ語のものは勿論のこと、ヘーゲル自身が原典でプラトンやアリストテレスを読んでいますから、ヘーゲルを理解しようとする私たちは、ヘーゲルだけ読んでいては、その理解はおぼつかないことになります。

Q. 4 harmonie は、現在の音楽の「harmony」（ママ）も意味していますか。それとも調和という意味だけですか？

A. 4 「harmony」は、「harmony」と書きましょう。harmonie（ハルモニエー）=harmonia（ハルモニエー）は、何かの調和ですが、不協和音に対して、（協）和音も意味します。rhythmos（リュトモス）は、何かの律動で、これは、リズムのことですし、melodia（メローディア）は、旋律を意味します。

（続く）

なお、「倫理」という漢字二字の表現も、「倫」が元来「なかま」で、そこから「人のあつまり」を意味し、そこには、「人のあつまり」が成立、存続するための「きまり」も含意されるだろうが、よりはっきりと、「理」（すなわち「ことわり」「道理」）を添えることによって、「倫理」ということが言われている、というのは、後世からの、多少（いや、かなり）こじつけによる説明と言われるかもしれません。そこで、文献にあるかぎりというと、いわゆる、倫理的なこと、道徳的な事柄を内容に立ち入って言及しているのは、『易経』にもありますが、「倫理」という漢字二字の表現についていうと、この表現があるのは『易経』ではなくて、『礼記』の楽記第十九だけです。四書五経の中で、「倫理」という漢字二字があらわれるのは、この『礼記』の楽記第十九だけです（そういう、お前は、四書五経を読破した上で言っているのか、と尋ねられると、調べた人の報告を信用して言っているだけ、とことわっておきます。いずれ、四書五経を読破したら、このことわりがき、なしですませるようになるでしょう）。で、そこでは、

凡音者生於人心者也。（凡そ音は人の心に生ずる者なり）

楽者通倫理者也。（楽は倫理に通ずる者なり）『礼記』楽記第十九より

とされていて、ここでの「倫理」は、「万物の秩序」とか「人間にも物にも通じる道理」のような意味であって、現在、大学の倫理学の分野で研究対象とされていることとは、ずれている、と思いますが、ethics（ギリシア語のethos、エートスは、「人柄」くらいの意味）の訳語としての「倫理」の名称そのものは、ここから採られたのでしょうか。しかしそれよりも、『論語』の孔子がしばしば、いにしへの儀礼が行なわれなくなったのを嘆いて、儀式をあるべき姿に戻すことを望んだ、その儀礼は『礼記』に著わされており、中でも、儀式で用いられる音楽について述べているのが、楽記だとすれば、儀式で用いられる音楽は、倫理、すなわち、「万物の秩序」とか「人間にも物にも通じる道理」に通じている、ということなのでしょう。

Q. 5 ヘラクレイトスの火だったり、タレスの水、アナクシメネスの空気、ピュタゴラスの数やアトムなど色々なものが万物のアルケーとしていますが、ちょっとめずらしいものを万物のアルケーだとしている人はいるのでしょうか？

Q. 5' ヘラクレイトスのいう「火」がタレスらがいう「水」「空気」と少しちがうことに驚きました。

Q.5” 高校で習ったヘラクレイトスは、万物の根源を火とした人と単純に見えていましたが、ヘラクレイトスの考え方を具体的に聞くと考えていたよりも複雑だなと思いました。

A.5 何をめずらしいと思うか、受け取り手次第だと思いますが、ピュタゴラスの数は、アリストテレスによれば、質料だということですから、ちょっと、他と違うと思いますが。

5 Q.6 ヘラクレイトスの言っていることは非常に抽象的でさっぱり理解できませんでした。ですが、断片それぞれが詩的で格言めいている感じは、人を惹きつけて魅了するには十分だなあと、私もあります。私も「こいつを何とか理解してやろう」という気持ちになりました。

A.6 翻訳で理解しようなどと思わないで、ギリシア語を学んで、ギリシア語で読んで理解して下さい。

10 Q.7 原因があるから結論があり、その間には過程があるのだという考え方をしがちだった自分の態度を、ヘラクレイトスの「この世界は何らかの神や人間がつくったものではなく…」という言葉によって気付かされました。ものすごいカルチャーショック(?)でした。「変化することによって安息している」の一行がグッときました。ミルトンの『失樂園』の中にある、「絢らんなる奴隷生活の平穩無事な軀よりも苦難に満ちた自由をこそ選ぼうではないか」という台詞を思い
15 出しました。

A.7 ユダヤ教やキリスト教の(神による世界の)創造論とは異なって、ギリシア人にとっては、世界は最初からある、という考え方が普通です。原因と結果の関係についても、私たちが当たり前だと思っている、近現代の考え方で理解しようとすると、うまくいかないところがあります。今、中世哲学史の講義で、古代のアリストテレスがいう論証・推論に関する「必然性」を、中
20 世、近現代の人たちがどう解釈しているかを検討することをやっていますが、そこで、これこれの事象があれば(それが原因となって)「必然的に(必ず)」これこれの事象(結果)が生じる、と言えるのかどうか、言えるとすれば、その根拠はどこにあるのか、を問題にしています。ところが、古代のアリストテレスと、中世や近現代の人たちでは、原因と結果について、前提としている理解がどうもちがうようなので、ちょっと、わかりにくい事態が生じているようです。

25 Q.8 僕はこれまで引用で他人の考えをそのままその通りだに使っていることが多かったです。これから引用を使う時は引用にさらに自分の新たな自分の意見を加えるか、批判するか、どちらかにします。

A.8 うう～ん、引用に関して、なにも固定的に、そのように考える必要はありません。論文やレポートでは、何か自分が主張したいことがあるはずで、その主張したい内容次第で、被引用文の扱いが変わってきます。例えば、自分がAを主張したいとき、他の人が本や論文で、自分
30 と同じ根拠・理由か、少し違うけれども、ほぼ同じ根拠・理由で、Aということを主張していれば、自分と同じAということを主張する人が他にもいる、という例として挙げて(引用して)、自分がAを主張することを補強するために使うことがあります。しかし、この場合、自分のオリジナリティ(他の人とは異なる存在価値)は、同じAを主張していても、その根拠・理由が、(方向
35 性はほぼ同じだが)ちょっと違う、というところにだけあります。主張内容(A)も、その根拠・理由も全く同じでは、論文を書く意味がありませんから。

他方、誰か他の人が、Bということを主張しているが、自分は、Bではなくて、Aである、と主張したいときは、Bを主張する人の根拠・理由を引用して、それを論駁することによって、Bを主張することはできないことを示し(論証し)、それに対して、自分がAを主張する根拠・理由を示して、自分がBではなくて、Aを主張することの正しいことを示す(論証する)、というのが、よく行なわれます。それまで、通説となっていたことを覆して、新しい説を主張するときには、このやり方で行なわれるのが普通です。

西洋古代哲学史 第12回 (2015.07.02.)

Q.1 " , ", " , " . " , " . "のお話は, 「見ているつもり」でほんとうは見えていないということ, 実感させられました。

Q.1' ... また先生の「—, —。」はかねてより少しだけ気になっていたのが今日理由が知れてすっきりしました。「—, —。」と決められているとばかり思っていたので驚きました。

A.1 レポート課題の Web サイトに, 昔 (2006.04.25), 私が書いた「句読点に苦闘!?!」(『生協だより』103号より) をアップロードしておきましたので, 読んでおいて下さい。

因に, 今, 手許にある, 木村・相良『独和辞典』, 『クラウン仏和辞典』(初版), 近藤・好並『論理学入門』(岩波全書), 井関『記号論理学』(槇書店), 竹内『線形論理入門』(日本評論社), 田中『ラテン語初歩』(岩波書店) の日本語の横書き部分は, 「,」と「.」ですが, 小平編『(高校) 数学 III』(東京書籍) は, 流石に, (当時の) 文部省検定済み教科書だけあって, 「,」と「。」を使っています。

Q.2 古代ギリシアにおいて「魂」はどのように理解されていたのですか。やはり, 心, 精神のようなものとして促 (ママ, 捉) えられていたのですか。それとも, もっと広い意味を持つものだったのですか。

Q.2' ヘラクレイトス以前の「魂」は, ホメロス以来生命原理としての意味を担っていた, という記述がありましたが, いわゆる一般的に我々が解釈している魂の意味で使われていたということでしょうか。

A.2 「いわゆる一般的に我々が解釈している魂の意味」というのは, どういう意味でしょうか? p. 24, ll. 1039ff. のことだと思いますが, ヘラクレイトスより前は, 「魂 (プシューケー)」は, 漠然と, 生命原理としての意味しかなく, 「プシューケー」という音から連想できるとよいのですが, 「息」みたいなイメージしかなかったということです。そして, この, 漠然として生命原理としての「魂 (プシューケー)」とは別に, 「気概 (テューモス)」とか「理性・知性 (ノオス, 後に, ヌース)」という言葉があった, ということです。

それに対して, ヘラクレイトスになると, 「魂 (プシューケー)」は, 単なる, 生命原理としての意味ではなくて, その「魂 (プシューケー)」が, 思考・感覚・意識などのはたらきを統合する座として捉えられるようになった, ということです。

Q.3 魂の乾・湿とは斬新な表現でした。「魂を湿らせた」とはどういうことでしょうか。

Q.3' 魂がかわいた, あるいは湿った状態というのが, やはり今一つイメージできなかった。

A.3 結論から言うと, わかりません。つまり, 即物的次元でわかる, という話ではない, ということです。というのも, アリストテレスから見た, 例えば, タレースのいう「水」は, 植物でも動物でも, 命のあるところには, 何かしら「水気, 湿り気」がある, ということから, タレースは, 生命原理としての「水」ということを言ったのかもしれませんが, ヘラクレイトスは, この次元ではなくて, 比喩として, 「魂」の理想的な状態を, 「乾いた」状態と表現し, 理想的な状態から劣った状態を, 「湿った」状態と言っているのではないかと推測されるだけだからです。ヘラクレイトスは, コスモス (宇宙, 秩序) を「永遠に生きる火」(Fr. 30) と捉え, 魂も火であるのが, 優れた本来の状態であって, 水である血や土である肉 (これらは, 火にくらべて, 湿っている, と考える) との間で, 宇宙的, 自然的循環・変化にさらされているので, 覚醒 (目覚めた状態) から眠り (眠っているが生きてはいる) へ, さらに, 眠りから死へ, という移行・変化は, 魂が「乾いた」状態から, 「湿った」状態へと, いわば, 下って行く, 下向きの道と考えられていたのではないかと, 思われます。つまり, 実際に, 即物的に (物理的に), 魂が「乾いている」とか「湿っている」とかいうことではなくて (それもあるかもしれないが), 理想的な状態を「永遠に生きる火」と見なした場合に, 魂の状態を, 比喩的に表現している, というのが, 断片から理解できることのひとつです。

Q.4 「魂」の使用回数による考察ですが、各氏の残存する文章の量（語数）は大差ないのでしょうか？

A.4 哲学者ごとに残存量は違いますし、もともとどれだけあって、それぞれ何割残っているのかもよくわかりません。より古い方が、残存量が少なく、より後の時代ほど、多い、という傾向はあります。ヘラクレイトスは古い方ですが、それにしても、他の哲学者とちがって、「プシューケー」という語が多く使われている、と言えます。

Q.5 ヘラクレイトスの考え方は自然法の考え方だと思いました。自然法と言えは国際法の父と呼ばれるグロティウスやホッブズが思い浮かんだのですが、ヘラクレイトスの考え方と近世の自然法の違いは何でしょうか。

A.5 ヘラクレイトスの考え方の何を自然法の考え方だと思ったのでしょうか。「火」とか「ロゴス」から思いついたのでしょうか。

自然法というのを、慣習や立法、その他の制度によらずに、社会や人間の本性に基づく法則や規範のことと理解すると、そういう意味での「自然法」的考え方は、ある意味で、ヘラクレイトスの「火」や「ロゴス」を受け継いでいる、ストア派には、そういう考え方（「自然法」的考え方）があると言えるかもしれません。しかし、ヘラクレイトスの「火」や「ロゴス」には、そのように（つまり、人間社会の法や規範にかかわると）解釈されうる側面のほかに、現在の私たちの区分で言えば、自然科学的な意味での、自然法則にもあてはまる側面が、「火」や「ロゴス」にはあると思います。

Q.6 ... 先日テレビを見ているときに、ソポクレスという人の番組が（ママ、を？）やっていました。ソポクレス・・・アリストテレス・・・ソポクレス・・・似ている・・・ということで勝手に古代ギリシアの哲学者だと思っていたら違いました。「オイディプス王」（ママ、『オイディプス王』）という変な哲学書書いた人かなと思っていたら詩人でした。しかもその界限（ママ、分野、領域）では有名な人で、古代ギリシア三大悲劇詩人の1人で「オイディプス王」（ママ）は代表作の1つでした。

ソポクレスは哲学とは全く関係ありませんか？ 哲学をしていたという記述なり何なりないのでしょうか？ 関係が少しでもあってほしいなと思っています...

A.6 現代の、哲学、史学、文学という区分では、ギリシア悲劇は、韻文で書かれているので、ソポクレス、アイスキュロス、エウリピデスは、三大悲劇作家（詩人）ということになっていきます。これについては、授業のプリント、序説のp.3で扱っていますが、覚えていませんか？ 哲学、史学、文学という区分は、近現代のものなので、それを一旦、ペンディングして、史学に分類される、トゥーキューディデースも、文学（詩人）に分類される、ソポクレスも、人間いかに生きるべきか、という問題を投げかけているので、西洋古代哲学史の研究者は、研究対象として扱っています。（西洋古典文献学を方法として用いる）西洋古代哲学史の分野の研究者の仕事として、F.M. コーンフォードには、『トゥーキューディデース』という著作がありますし、藤澤令夫先生には、岩波文庫に、ソポクレスの『オイディプス王』の翻訳がありますし、研究論文もあります。実際、某大学の西洋古代哲学史の授業では、年度によってテキストに違いがありますが、プラトンやアリストテレスを読む演習の他に、トゥーキューディデースやホメロス、エウリピデスなどを読む演習も受講できるようになっていました。

Q.7 「思慮を健全に保つ」ことは、ソクラテスのいう「魂の世話」ともつながるものなのだろうかと疑問に思いました。

A.7 文脈が違うかもしれませんが、ヘラクレイトスは、「思慮を健全に保つ」ことをしていない人々に対して、警告し、ソクラテスは、「魂の世話」をせず、物質的なことにかまけている人々に対して、警告、批判している、という点で共通するところがあると思います。

Q.8 ... 授業を聞いて思ったのは、ヘラクレイトスを除くミレトス派の人々は、なぜ、自己内部の在り方ではなく、万物の生成の問題が中心課題であったのかということである。私は、万

物の話うんぬんよりも、まず自己の内部の課題が先にくると思ったので、この点が疑問に思った。

A. 8 いい質問です、と言いたいところですが、これはすでに、この授業の序説でも指摘したように、アリストテレスの四原因論という見方からすると、タレス等、ミレトスの人たちは、この世界が何からできているかという、質料因をもとめて、自然哲学にたずさわった、ということ
5 になるだけで、こういうアリストテレスの見方をしなければ、タレス等も、人間のこと、社会の
ことなどにも関心をもって、何らかの探究をしていたはずです。プリント、pp. 2-4 参照。

Q. 8 学生のために言ってる時こそ学生のためではないとおっしゃっていましたが、クォーター
制はやはり学生のためではないんですか？

A. 8 表向きは（公式には）学生のためでしょう、とだけ言っておきます。

10 Q. 9 レポート課題では、どのように章立てすればよいのですか？

A. 9 自分で設定するテーマ次第ですから、一般的には言えません。しかし、最初に、問題設
定を述べ、主張したいこと（結論）を論証するために必要な論点・項目ごとに、論証してゆき、最
後にまとめる、ということしか言えません。

15 Q. 10 まだ予備レポートを提出していないのですが、7月中に出しても見て頂けるのでしょ
うか。

A. 10 どうぞ、提出して下さい。

Q. 11 レポートについて質問なのですが、本の中の引用を引用したい時、「この本（*）の中
のここから引用しました」と書くのは少しややこしいので、その本の引用をそのまま真似てひと
つの引用で住ませる、というのは大丈夫でしょうか。（レポートでこの本（*）の本文を扱ってい
20 る場合と扱っていない場合では違うのでしょうか）

A. 11 いわゆる、「孫引き」の問題ですね。ある本(A)に別の本(B)からの引用がある場合、

(1) 自分の論文やレポートに、別の本(B)からの引用部分だけを利用したい場合と、

(2) ある本(A)が、別の本(B)を引用している、その引用の仕方自体を問題にしたいとき、

25 で、異なります。後者(2)の場合は、ある本(A)が、別の本(B)を引用している、その引用の仕
方自体をそっくりそのまま再現して、引用します。これはこれで、問題ありません。しかし、多く
の場合は、前者(1)の、ある本(A)のほうは、どうでもよくて、別の本(B)からの引用を利用した
い、ということだと思います。この場合は、原則として、このような「孫引き」は、やらないほう
が無難です。本当は、「孫引き」は禁止！と言いたいところですが、物理的に、それは不可能だ、
ということがあります。つまり、ある本(A)は、手に入ったけれども、別の本(B)は入手できない、
30 ということがあるからです。その場合には、仕方がないので、ある本(A)の何頁に引用されてい
る、別の本(B)からの引用は、これこれ、となっている、という仕方で注記することになります。

西洋古代哲学史 第 13 回 (2015.07.09.)

Q. 1 なぜ、卒業論文で (ママ, が ?) 全文英語なのですか？

A. 1 英語ではなくて、ラテン語です。

母国語ではなくて外国語で書くということは、言うべき内容を論理的に構成して、わかりやす
く言えば、かなり、頭を使って、しかも、感情的なことは言いたくても隔靴搔痒の感のある表現し
かできない状態で、表現するという一種の哲学的トレーニングだと思って下さい。それにこれは、
日本語で書いて、それをラテン語に訳したのではなくて、最初からラテン語で発想して、ラテン
語で書きました。その後も、論文や欧文の要旨など、いくつか書きました (論文は、英語、フラン
ス語、要旨は、英語、ドイツ語、イタリア語、ラテン語) が、欧文で書くときは、いつもそうで
す。しかし、大学院を受けるときに、卒論が外国文で書かれている場合は、その日本語訳も提出
せよ、ということだったので、自分で書いたラテン語の卒論をほぼ 1 週間かかって、全部、日
本語に訳しました (自分で書いているのに、よくわからないところがあって、苦労しました)。

私が学部を卒業した大学の「哲学」専攻は、卒論を外国語で書いてもよいことになっていたの
です (18 世紀～19 世紀中頃までは、ヨーロッパの大学では論文はラテン語で書くものでした)。今
でも、英文は英語で、というようになってはいるはずですが、仏文と独文は、それぞれ、フランス
語かドイツ語でもよいし、日本語でもよい、という大学が多いのではないのでしょうか。学部生の
頃の私は、外国人にせよ、日本人にせよ、ラテン語の読める (教養のある) 人に読んでもらいた
かったので、なんでもラテン語で書くことに凝っていた、というか夢中になっていたようです (今
でも、多少、その傾向が残っています)。

私の Web サイトには、Pagina Latina (ラテン語の頁) へのリンクがはってありますが、そこ
には、学生のときに書いた、ラテン語の詩、英文のレポート、ドイツ語のレポート (ドイツ人の先生
による演習で提出したもの) を (はずかしながら) アップロードしてあります。英国人の先生の
演習で提出した英文のレポートやデカルトのテキストを読む演習で提出したフランス語のレポ
ートもあったはずなのですが、電子テキスト化できていないので、アップロードしてあるのは、ラ
テン語、英語、ドイツ語のものだけです。

このコメントの第 7 回 (2015.05.21.) p. 15, l. 30–p. 16 に、卒論に関することを書いていますか
ら、それを読んでいなかったら読んでおいてください。

Q. 2 「カオス chaos の cha があくびからきたものである」や「プシュケ (ママ, プシューケー)
のプシュが息の音からきたものだ」という話が面白かったです。ただなぜ混沌という意味の chaos
があくびの音を元にしたものなのかと思いました。

A. 2 いい質問です。実は、秩序ある状態としての cosmos (コスモス) に対して、無秩序な (つ
まり、混沌) 状態としての chaos (カオス) という見方は、いつの時代の誰が言い始めたのか知り
ませんが (そして、それはそれで、そのように定義して使うのは自由ですが)、古代ギリシアの原
初的な chaos (カオス) の意味とは違うものです。

例えば、ニーチェが、次のような言い方をしているのは、秩序としてのコスモスに対して、無
秩序、つまり、混沌としてのカオスという捉え方をしている例でしょう。

Da soll die Masse aus sich heraus das Grosse, das Chaos also aus sich heraus die Ordnung gebären.
[Nietzsche, *Unzeitgemässe Betrachtungen*, II, 9, KSA 1, S. 320.]

ここにおいて、大衆が自身から偉大なものを生み、混沌が自身から秩序を生むことになる。
[ニーチェ『反時代的考察』第 2 編, 9]

Der Gesamt-Charakter der Welt ist dagegen in alle Ewigkeit Chaos, nicht im Sinne der fehlenden
Nothwendigkeit, sondern der fehlenden Ordnung, Gliederung, Form, Schönheit, Weisheit, und wie
alle unsere ästhetischen Menschlichkeiten heissen. [Nietzsche, *Die fröhliche Wissenschaft*, Drittes
Buch, 109, KSA 3, S. 468.]

それに対して、世界の総体の性格は、永遠にいつまでも混沌（カオス）である。それも、必然性を欠くという意味ではなくて、秩序(Ordnung, コスモスのこと)、組織、形式、美、智慧および我々の美的人間性のそう呼ぶようなものすべてを欠いているという意味である。[ニーチェ『悦ばしき知識』第3書, 109]

- 5 このように、秩序(Ordnung, コスモスのこと)に対立するものとしての、混沌（カオス）の使い方は、近現代では、普通に見られるものだと思います。ただ、ニーチェの場合は、混沌としてのカオスというだけでなく、何かを生み出す「力」としての、カオス、それも、(生み出す)必然性を欠くことはない、カオス、と捉えている点で、次のヘシオドスのいうカオスと通じる見方をしているとも言えます(この点については、ハイデッガーの『ニーチェ』に指摘があります。M. Heidegger, *Nietzsche*, I, SS. 349–350).

これに対して、もともとのカオスの意味を知る、手がかりとなるテキストは、ヘシオドスの『テオゴニア (Theogonia, 神統記)』です。

Ἦ τοι μὲν πρότιστα Χάος γένητ', αὐτὰρ ἔπειτα Γαῖ' εὐρύστερνος. [Hesiodos, *Theogonia*, II. 116–7]

- 15 まず最初にカオスが生じた さてつぎに胸幅広い大地（ガイア）（が生じた）（廣川洋一訳¹）

ここで、「生じた」といっても、ユダヤ教やキリスト教の創造論のように、無から創造されたのではなくて、もともと何かあったところに、「カオスが生じた」というのは、もともとあった、ものとのを隔てる空隙が開いた、ということで、カオスは、この空隙をさすと考えられます。それは、ちょうど、あくびをするときに、口を「カハアッ」とあけるイメージで言われていると解釈すると、あくびにポイントがあるのではなくて、口を大きくあける、ことにポイントがあるようです。この限りでは、カオスは、単に、空隙であって、秩序ある状態としての cosmos（コスモス）に対して、無秩序な（つまり、混沌）状態としての chaos（カオス）という見方は、まったくあてはまりません。

- しかし、この後を読んでゆくと、このカオスから、エレボス（幽冥）とニュクス（夜）が生じたり（生まれたり）(I. 123)、後には、ゼウスの雷光がカオスをつかんだり (I. 700)するので、カオスは、まったくの、そして単なる空間ではなくて、何かわからないけれども、何らかのもので充溢した実体的なものであると捉えられているようです。

- この何かわからない、という点と、最初に生じた（あった）という点から、後の時代になって、誰が言い出したのかわかりませんが、秩序ある状態としての cosmos（コスモス）に対して、無秩序な（つまり、混沌）状態としての chaos（カオス）という見方が生じたのではないかと推測できると思いますが、どうでしょうか。

ひょっとすると、この問題は、すでに、西洋古代哲学史や西洋古典文献学の分野で研究されていることかもしれませんが、文献学的に跡づけて論証すれば、卒論のレヴェルならば、十分評価できる論文になると思います。

- 35 Q. 3 すみません。本日は質問はありません。

A. 3 すみません。本日は質問していただけるような内容のある講義ができませんでした。カハアッ！

Q. 4 レポートを書く為に参考にしたら良い文献があれば教えて下さい。

- 40 A. 4 自分で探すのが勉強ですつ、と突き放すこともできますが、訊かれると、つい、答えてしまうのが私のよくないところです。

レポートや論文の書き方そのものについては、何よりもまず、この授業用の Web 上の『レポート作成上の注意』(広島大学)と「引用の作法について」(高橋祥吾氏作成)をよく読んで下さい。

¹ヘシオドス『神統記』、廣川洋一訳、岩波文庫、1984、pp. 21–22.

書籍としては、いろいろ、出ていますが、いわゆる、文系向きとしては、(学燈社を創設し、昭和女子大学教授もつとめ、多くの学習参考書も執筆し、研究者としては、『大鏡新考』(全三巻)の著者でもある)保坂弘司大先生の、

保坂弘司『レポート・小論文・卒論の書き方』, 講談社学術文庫, 昭和 53 年 (1978).

- 5 が、資料の探し方、論文の構成、書式から、実例を挙げて解説し、レポート、小論文、卒論にわけて、中でも、レポートに半ば以上の紙数を割いて説明している力作です。パソコンやワープロを使わない、原稿用紙を使っていた時代のものなのですが、論文を書くということの本質は変わらないので、内容は、今でも通用します。その意味で、是非読んで欲しい本です(日本語学日本文学を専門にする人たちには特に)。この文庫本が出た時点で 70 歳を越える老先生が若い学生たちに諄々と説いている感じで、著者自身の卒論執筆の際の状況の記述は、当時の早稲田大学の卒論指導の記録としても価値があると思います。(著者の卒論の指導教授だった、歌人の)窪田空穂先生晩年に著者が目白のお邸に訪ねたときに言われた言葉です。

- 15 「保坂よ、家にな、古い闇魔帳(成績簿のこと)が残っていて、繰ってみたら、お前の卒論の点数が出ていたよ、いい成績だったぜ」(保坂弘司『レポート・小論文・卒論の書き方』, 講談社学術文庫, 昭和 53 年 (1978), p. 205.)

また、どちらかという、理系向きには、物理学者の木下是雄先生の、次の本です。

木下是雄『レポートの組み立て方』, ちくま学芸文庫, 1994.

- 20 これらの本から学べることは、今回のレポートにすぐに役立つ、おわり、というものではありません。今後、他の授業や、卒論、修論などを書く際にも、参考にするべき事柄です。ですから、今回のレポートにすぐに役立つられなくても、これからのために、是非、時間をかけて少しずつ読んで、今後、レポートや論文を書く際に、ひとつひとつ、実行してってください。

そして、講義内容についてですが、ソクラテス以前の哲学者たちに関しては、下手に解説書を読むよりも、まず自分で断片の日本語訳を読むことが必要です。それには、

- 25 ディールス=クランツ編『ソクラテス以前哲学者断片集』5分冊+別巻, 内山勝利編, 岩波書店, 1996-1998.

廣川洋一『ソクラテス以前の哲学者』, 講談社学術文庫, 1997.

がよいでしょう。また、ちょっと古いけれども、訳がしっかりしているのは(ヘラクレイトスやパルメニデスが田中美知太郎先生や藤澤令夫先生によって訳されている、という意味ですが)、

『ギリシア思想家集』(「世界文学大系 63」), 筑摩書房, 1965.

- 30 また、私は、原典(英語+ギリシア語)しか読んで読んでいませんが、その日本語訳、カーク他『ソクラテス以前の哲学者たち』, 内山勝利他訳, 京都大学学術出版会, 2006. も、よいかもかもしれません(原典がよい本なので)。

また、これらの本には、さらに、文献案内が付いているので、それをもとにさらに別の文献を探すことができます。

- 35 Q. 5 赤井先生の卒論の推敲段階のものと、完成形のものを実際に見て、こんな風に推敲に推敲を重ねて卒論を書かなくてはいけないのだなあと思いました。私も今、卒論の準備をしているので、参考にして頑張りたいと思います。

- 40 A. 5 頑張ってください。ですが、今は、以前と違って、パソコンを使って、実際に論文に使うかどうかは別にして、材料となる、資料やメモ、思いつきの文章を、順番を気にせず、どんどん、打ち込んで(入力して)おけるので、かなり、効率よく論文を書くことができるようになっていますから、これから、卒論や修論、博論を書く人たちがうらやましいです。

以前、哲学の学生で、自宅から外出中、授業の休み時間でも、いつでも時間があるときに、携帯で、メモや資料、アイデアをどんどん入力して、自分のパソコン宛に、1日に何通もメールを

送っておき、帰宅したら、それをパソコンで編集して、卒論を書いてしまった人がいました。彼は自分の専門に近いことをやっている先生を見つけて（実は、赤井の先輩を紹介したのですが）、さっさとよその大学の大学院に行ってしまいました。教員から見て、理想的な学生です。

私は、今でも、パソコンが立ち上がっていなくても、ノート（A5 版のルース・リーフ）にはい
5 つでも書けるので、ジェットブラック（シェーファー）、ロイヤルブルー（ペリカン）、レッド（ペ
リカン）、パープル（Waterman）の4本の万年筆で、原稿の原稿を書いています。色分けのため、そ
ろそろ、緑と柿色・橙（だいたい）色も欲しいと思う今日この頃です。そのノートから必要なと
ころを採って、パソコンに入力しています。

10 Q.6 文科省は「こういうふうに変えろ。」とは言わず「変えてはどうですか。」とアプローチ
してくるとのことですが、それは実験したいということですか。

A.6 それもあるかと思いますが、京大と東大だと、何をしたいと大学が言っても、大抵、「いい
いでしょう」となるのですが、京大と東大以外の旧帝大（北大、東北大、名大、阪大、九大）だと、
少し、「いかななものでしょうねえ〜」とちょっと条件をつけてくるのです。そして、さらに、そ
15 れ以外の大学になると、もっと、きびしい反応ですが、文科省がそれぞれの大学に期待している
ことは少しずつ違うようで、広島大学に対しては、文科省から「こうしろ、ああしろ」と言わな
くても、大学の方から進んで、文科省は口に出して言わないけれども、本当はやって欲しいこと
を「こうします、ああします」と言ってくることで、そして、それを見た他の大学が「右へ倣え」す
ることを期待しているように思います。

20 Q.7 批判する側も、批判されて堂々としている人も、「自分の考えを簡単には変えない」、「他
人の言うことを考えなしに鵜呑みにしない」という点で、自分には足りないところを持っていて
憧れます...（後畧）

A.7 ここで、「批判する」と言われていることは、戦争やけんかではなくて、ソクラテスやプ
ラトンの *ἔλεγχος*, *elenchos*（エレンコス、論駁）や、アリストテレスの *πεῖρα*, *peira*（ペイラ、吟
味）の一部として、ある問題を複数の人たちで、いわば、共同探究（*συζήτησις*, *syzetesis*, シュ
25 ゼーテーシス）しているものと考えて、不適切な、あるいは、間違っていると思われる説を取り除
き、より適切なものに修正するための手続きなのですから、本来は、批判されている人、という
言い方は適当ではなくて、批判されているのは、「人」ではなく、その人が主張する、「解釈」だっ
たり「理論」だったり「説」だったりするわけです。同じ問題や分野にたずっさわっている、共
同探究する仲間（大袈裟に拡大すれば、人類全体）という意識があれば、個人のことは問題では
30 なくて、事柄（*πρᾶγμα*, *pragma*, プラージュマ）自体がどうであるかが、問題にされるはずな
のですが、実際には、そうもいかないようですね。ただ、批判される、ということは、批判する人か
らみて、批判されている人は、批判するに値する「説」を唱えている、とみなされているわけ
ですから、批判してくれている人は、自分と一緒に、自分の考え方を吟味してくれている、ありが
たい共同探究者として、批判に耳をかたむけることが大切でしょう。現実には、無視されて、批
35 判さえしてもらえない（相手にされない）こともあるのですから。

西洋古代哲学史 第 14 回 (2015.07.16.)

Q. 1 私はまだ予備レポートを提出していません。しかし、本レポートの前には提出したいと考えています。まだ受け付けて下さいますか？

A. 1 どうぞ、はやめに提出して下さい。

5 Q. 2 名詞を漢字、副詞をひらがなというお話は興味深かったです。私も「無い」と「ない」のつかいわけに考えこんだりします。

Q. 2' 今日の講義を聞いて (ママ、聴いて), 「～するところ」や「時」の使い方など、言葉使いは、とても奥が深いなあと感じました。語法に注目して、小説などを読むのもおもしろいなあと思いました。

10 A. 2 主語にあたるものが存在しないことを表現するのが、「無い」でしようし、「存在しない」のように、「存在する」ことを否定する意味の「～ない」は、平仮名で「～ない」でしょう。これに関連して、ひとつ、言い忘れたことがあります。名詞の場合と、接続語句や副詞の場合については、前回、言ったとおりですが、動詞の場合ですが、動詞の目的語になる名詞が具体的な場合は、動詞も漢字で、抽象的な場合は、動詞は平仮名という区別です。例えば、

15 手に小旗を持つ。／ 寛容な心をもつ。

というように、です。この区別は、ある時期までの書き手によっては徹底しているので、他人の書いたものを読むときに、注意してみてください。ワープロやパソコンの使用が広まるにつれて失われつつあるのが実に残念な区別です。

なお、日本語の表記、表現、特に格助詞については、

20 横井忠夫, 1971, 『誤訳 悪訳の病理 ミスを防ぐための α から ω まで』, 現代ジャーナリズム出版会

の p. 150 などを参照。この本は、後に、違う出版社から再刊されていますし、図書館にも数冊あります。著者は、英独仏伊露などができる編集者で、横文字のものを日本語にして (つまり、翻訳して) 表現するときの問題点を事例を挙げて指摘してくれるありがたい本です。私は、大学に
25 入る前に、この本に出会ってしまったので、かえって、ものが書けなくなっていました (ホンマか? 正確には、書いて原稿の形ではもっているけれども、公表するのを恐れている、というところでしょうか)。

30 Q. 3 レポートの参考文献についてですが、前回のコメントで「ソクラテス以前の哲学者たちに関しては、解説書ではなく、断片の日本語訳を読むことが必要」と書かれていましたが、プラトンやアリストテレスの場合はそうではないのでしょうか？

35 A. 3 今、講義では、ソクラテス以前の哲学者を扱っているもので、そう言っているまでで、プラトンやアリストテレスでも、もちろん、それ以降の哲学者でも、すべて、解説書よりも、できれば、原典でテキストを、原典で読めなければ、やむなく、原典の翻訳をまず読むべきです。レポート関係の Web サイトに、ショーペンハウアーとヤスパースの文章を挙げて、読んでいない人は、必読! と言っているのは、そのためです。読みましたか? ショーペンハウアーとヤスパースも、原則として、原典を読め! と言っているでしょう。

40 ついでに言うと、「ソクラテス以前の哲学者たちに関しては」という部分は、「レポートの書き方に関しては～」それに対して「ソクラテス以前の哲学者たち (それに限らず、古代・中世・近現代のおよそすべての哲学者の著作) に関しては～」という対比で言っているのであって、「ソクラテス以前の哲学者たちに関しては～」それに対して「プラトンやアリストテレスに関しては～」という対比ではないことは、文脈からわかりませんか? 私の文章表現能力の欠如によるものとはいえ、本当に、プラトンが『パイドロス』や『第七書簡』で言っているように、「書かれた文字は、生きたことばの影であって、書いた者が意図していることが読み手に伝わらない」ということを実感します。

なおさらに、「参考文献」という表現を、私は使うべきではなく、「文献」または「引用文献」と表記すべきだと思っています。それは、次の Q.4 とも関係があります。

Q.4 現在レポートの製作中（ママ、作成中？でも、本当に製作しているのなら、期待してしまいます。この場合、「製作」というのは、銅像など造形美術の作品のように物體的な材料を必要とする物を「製作」する、という意味ですから、レポートがどんな物體的な材料で製作されるのか期待してしまいます。これに対して、映画やテレビ番組、それに、授業のレポートなどは、「制作」あるいは「作成」するものです）で、参考資料を何冊か読んでいるのですが、どうしても「へえ」とか「なるほど」となるだけでなかなか批判的に考察できないのですが、何かアドバイスをいただけないでしょうか？（ちなみにエレア派、恐らくパルメニデスカゼノンをやるつもりです）自分の中では、批判的に考察＝「そこはこうではないか」と指摘するものだと考えているのでなかなか進まず、どうしてもただのまとめに終わってしまいます。（すいません。予備レポートも廣川先生の『ソクラテス以前の哲学者』などを読みましたが、同じように批判的考察が出来ず、提出できませんでした）

A.4 論文（研究論文としての、卒論、修論、博論）では、ある問題設定（これ自体が独自でオリジナリティがある場合がある）と、それに対する解決、解答として、従来の（定）説を、論拠をもって批判し、新しい解釈（説）を提示する、というところに、その論文の存在理由 *raison d'être* があるとされます。しかし、授業のレポートでは、実は、ここまで（できれば結構ですが）要求していません。具体的な作業・手続きとしては、以下のようになります。

1) 問題設定：（例）パルメニデスの「ト・エオン（在るもの）」の意味について←センスが問われる

2) 設定した問題についての従来の解釈あるいは翻訳を提示する（研究史）←翻訳や哲学史の本や解説などで言われていることを直接引用、間接引用（自分のことばで「まとめる」）して示す

3) パルメニデスのテキスト（原典、翻訳）に基づいて、2) で提示した翻訳・解釈の適切でないことを示し（文献学的な根拠を示して論証する）、新たな、より適切と考えられる解釈・翻訳を提示する

これらの中で、最も難しいのは、3) ですが、それ以前に、2) が重要です。というのは、ある解説書の内容を、直接引用ではなくて、自分のことばで「まとめ」て間接引用する場合、内容を変えずに、自分のことばで要約する、という作業は、実は、とても難しいのです（要約せずに、直接引用するほうが簡単です）。そして、同じ問題、テキストの同じ箇所について、何冊かの研究論文や解説を読むと、それぞれ、違う訳し方をしていたり、違う解釈をしていたりすることに気付いたら、そのことを、内容を正確に、どこがどう違うのかを報告できたら、レポートとしては、半分以上できたと思って結構です。

その上で、それらの既存の翻訳・解釈のどれとも異なる、より適切であると自分が考える翻訳・解釈を、（文献学的な根拠を示して）示せたら、3) の作業ができたことにはなりますが、これを充分に行なうには、原典を読めなくてはなりませんから、既存の翻訳に基づいて書くレポートでは、そこまでやる必要はありません。

そこで、パルメニデスならパルメニデスの同じ断片について、翻訳者や研究者によって、違う訳し方をしている箇所があります。その場合、それぞれ、どういう意味に解して、違う訳し方をしているのか、その違いを正確に理解して指摘できれば、研究史の一部を明らかにしたことになります。レポートとしては、（原典によらないで、翻訳によってわかる限りのことを明らかにしているという点で）そこまででも十分に評価できます。もちろん、そこから先のこと、例えば、この場合なら、パルメニデスは、どう考えて何を言っているのかについて、自分の理解・解釈を述べてもらって結構ですが、それは、原典によらないでわかる限りのこと、という条件付きであることを意識していなければならないでしょう。これに対して、問題そのものを自分で考える、ということとはできます。

Q.5 最終レポートでどういう事を取り上げようか迷っているのですが、そもそも西洋古代哲学史のレポートで扱うべき範囲はどこからどこまでですか。哲学史での「古代」という区分は西洋史のものと同じなのでしょうか。

A.5 まだ、文書で正式に指示していませんでしたが、これまでに、板書で、レポートの指示をした限りでは、「この講義で扱ったことに関して、自分でテーマを設定せよ」と指示したつもりなので、そもそも西洋古代哲学史が、いつからいつまでかということは、レポートで扱うべき範囲と関係ありません。レポートで扱うべき範囲は、「この講義で扱ったこと」です。（授業を受けていけばわかるように、イントロダクションで大まかな時代区分を示してあります。配布資料の年表を見てもわかるでしょう。授業を受けていなかったが、受けていても、もう忘れちゃったか？ そのイントロダクションでは、ソクラテス以前の哲学者から、プラトン、アリストテレスにも言及しました。その後、本論として、ソクラテス以前の哲学者を扱って、ピュタゴラスまできたところ）それに、西洋史の古代という区分は、どういうものなのか、教えて下さい。

Q.6 「魂は魂のままあるのが理想」「肉体は魂の墓場」といった考えは、インド哲学と相通じると感じましたが、数学・天文学が魂の浄めのために有効と考えるのはインド哲学では少しありえないなと思いました。

A.6 インド哲学、ということで何を想定しているのかにもよりますが、「数学・天文学」そのものではないし、「魂の浄め」というのでもありませんが、これに類似した発想は、（私の貧弱な知識によれば、ですが）インドにもあります。というか、私の印象では、ヨーロッパにあるような発想は、大抵、すでに、インドにあります。ただ、それが、インドの思想・宗教の主流として、一般に知られていないだけであるような気がします。

例えば、唯物論的な考え方も、（ヨーロッパ的な用語で言えば）原子論的な考え方も、無神論もあります。インド哲学を学習しているであろう諸君に対しては、今更、釈迦に説法かもしれませんが、インド思想史を見渡したとき、正統派と言えるのが、六派哲学（サーンキヤ、ヨーガ、ミーマーンサー、ヴェーダーンタ、ヴァイシェシカ、ニヤーヤ）で、いわば、偉大な異端派が、仏教やジャイナ教でしょう。正統バラモン系統の六派哲学の中で、ニヤーヤ学派は、論理学・論証を重視して、その根本経典『ニヤーヤ・スートラ』は、論理学書です。論理学といっても、認識論を含み、前提とする世界観によれば、主体は永遠のアートマンであり（正統バラモン系統ですから）、客体は実在の自然ということになります。そして、ニヤーヤが、他の学派と違うところは、本質的に確実で秩序のある真理を考察する（論理学）ことによって、人間の解脱が可能であると期待しているところです。この点が、最初に、「類似した発想は、インドにもあります」と言った理由です。論理学・論証を用いることは、仏教や他の学派への影響が多大ですが、さらに、ニヤーヤ学派自体に、二つの異なる傾向があること、つまり、哲学的には、唯物論的傾向があることと、霊的な解脱に関する神秘主義的傾向（肉体とアートマンの二元論を含む）があること、が、ピュタゴラス派と似ている、と言えるかもしれません。

以上のことを学問的に責任をもって言うには、『ニヤーヤ・スートラ』をはじめ、ニヤーヤ学派の論書を原典で読み、それに関する研究文献を読んで検討した上でなければなりません。それは、インドを専門に研究する諸君にお任せします。以上に関して、私が読んでるのは、主に、以下のものです（ちょっと、古いが、どれも重要な文献です）。

中村元, 1968, 『インド思想史 第2版』(岩波全書), 岩波書店。

40 金倉円照, 1962, 『インド哲学史』, 平楽寺書店。

Radhakrishnan, S., 1923, 1927, *Indian Philosophy*, 2 vols., London.

Chatterjee, S. C. and D. M. Datta, 1939, *An Introduction to Indian Philosophy*, Calcutta.

Zimmer, H., 1951, *Philosophies of India*, New York.

西洋古代哲学史 第 15 回 (2015.07.23.)

Q.1 天体音楽なるものをはじめて知りました。是非聴いてみたいと思います。一応レポートをかいいていみましたが今日のコメントにあったような本も参考にしたいです。

Q.1' 天体の音楽というものをはじめて知りました。とても素敵だと思いました。

5 Q.1" 天体の音楽は演奏したことがあります！ あまり難しくない曲でウィンナ・ワルツの形態だったと思います・・・

A.1 ワルツ「天体の音楽」op. 235 は、授業でも、最初に、弟のヨーゼフ・シュトラウスの曲だと言っているのに、ヨーゼフ・シュトラウスが誰の弟かわからないといけないと思ひ、有名な兄のヨハン・シュトラウスやシュトラウス一家の話をしたのですが・・・文字で書いたものを読
10 んでもらっても、講義を聴いてもらっても、執筆者・発話者の意図は、伝わらないときは伝わらないものですね。まあ、だから、この「コメント」があるわけですが・・・

ところで、シュトラウスの曲とは別に、星座の図柄を五線譜の音譜に写し取ってそれを演奏してみる、というのは、作曲者不在（実は神が作曲した、と強弁するかもしれませんが）の現代音楽風なやり方ですが、適切に編曲すれば、けっこういい曲になったりするようです。

15 Q.2 「運動する諸星の間には、その発する音が共鳴するので、調和があると主張することも・・・」という表現は、哲学的議論から離れるかもしれませんが、数学的なある数列から何かを感じたり、もっと言えば将棋盤から何か（音楽のような・・・）を感じたりすることがあります。ある意味（ママ、ある意味で）感覚の混乱とも解釈できるのかもしれませんが、もっと他のものがあるかもしれないと思います。レポートがんばります。

20 A.2 ある事象に臨んで、あらかじめ自分もっていると感じている感覚器官が、自分が予期していない現象を知覚する、ということはあると思います。指揮者なしのアンサンブルで、チェロだけの 15~6 人が 3~4 人ずつの 4 パートに分かれてある曲を合奏していたとき、私は 4
25 パートのトップを弾いていましたが、ある箇所から、全体が合わなくなってきた、マズイと思って耳を澄ましていると、15~6 人で弾いているのに、1, 2, 3 各パートのトップの 3 人の音だけしか聞こえなくなって、それに合わせて（といより、実際には、4 パートの私が、小節の第 1 拍
を、極端にアクセントをつけて強奏することによって、1, 2, 3 パートに拍子を知らせて）、その箇所を弾ききったことがあります。実際には、鳴っている音の中から、自分に必要な音だけを選択して聞き取るということができてしまったようです。

ところで、老人のぼやきだと思って読んでいただければよいのですが、「ある意味」は、このま
30 までは名詞ですが、ドイツ語の 4 格（対格）副詞のように、名詞の「ある意味」のままで、副詞的な「ある意味で」のように、助詞「〜で」や、「ある意味において」という意味で、口語ではよく使います。同じように、「〜けれど」という表現も、「〜けれども」の「も」を略した表現ですが、読み手は、「ある意味」を頭の中で、文法的には、「ある意味で」と解し、「〜けれど」という表現も、
35 「〜けれども」と解して理解します（意識していようといまいと）。こういう「ある意味」や「〜けれど」という表現は、読み手によっては、書き手が読み手によりかかって甘えている、読み手に charity を要求する表現であると受け止めることがあります。（文学作品で、そういう効果をねらって書く場合は別ですが、学術論文などでは、不要なことです）実は、私はそういう読み手の一人です（古い人間だということでしょうか）。すべての読み手がそうであるとはいえませんが、
40 また、学術論文でも使うことのできる表現として、「実際に」「実際に」「実際には」の 3 つは、すべて意味が（ニュアンスが）違いますが、わかりますか。ちなみに、「〜けれど」を「〜けれども」と書け、ということ、谷崎潤一郎の『文章讀本』に指摘があります。

レポートがんばってください。

45 Q.3 大学の講義を聴いていると、自分が知っているものは世界のあらゆる事象のうちのちりぐらいしかないのではないかとたびたび思われます。知れば、知るほどもっと分からない、未知の部分が広がるような不思議な気持ちになりました。今日の講義の「アキレウスと亀」の話で

ベルクソンが「アキレウスに聞いて（ママ、訊いて）みればよい」と答えたのが興味深く、おもしろかったです。

A.3 おっしゃる通りだと思います。このところ、猛暑日が続きますが、実は、いま（といってもここ9万年くらいの期間ですが）は間氷期で、本来は氷河期の中で、ちょっと暖かい時期が続いているだけなのに、人類は、CO₂を出しすぎて、温暖化しているなどと、思い上がったことを言っているだけかもしれません。本来は、もっと寒いのです。と试试看ても、暑いですね。

ベルクソンですが、彼は、コレージュ・ド・フランスで、最初は、古代中世哲学史の講義を、そして、後から、近現代哲学史の講義を担当するようになりましたが、実は、これは、ある意味で、正しいことだと思います。というのは、古代中世哲学史を専門に研究しないで、最初から、近現代哲学史の講義を担当していたら、その人の近現代哲学史の講義の内容は、古代中世哲学史の理解が素人っぽいままで、近現代哲学史の講義の内容もうすっぺらな感じになるでしょうが、ベルクソンは、そうではなかった、というのは流石だと思います。それに比べて、最初から、近現代哲学史の講義を担当している連中の・・・いや、このあたりでやめておきましょう。（この先、どうということになるか、ご想像にお任せします）

15 Q.4 もう14回目で時の流れをおそろしいなと思いました。

A.4 14回目ではありません。あなたにとっては14回目かもしれませんが、私にとっては、15回目です。鴨長明の『方丈記』は有名ですが、これに対して、こんなものは実在しませんが（架空の話なので信じないで下さい）、鴨短明（かものたんめい）の『放縦記（ほうしょうぎ）』という作品（架空のもので）の冒頭は、

20 行く川の流は絶えずして、しかも、元も子もあらず
というのがぴったりの感想ですね。

Q.5 文献を読んでいても、ロゴスやヌースといったギリシア語からきてる（というよりギリシア語の）単語は訳が難しく、本来のニュアンスを表現しづらいと感じる。英語でもよくあるので、そういう意味でも原典で読む（元の言語で読む）ことは大切だと感じた。

25 A.5 物理的、能力的に、可能ならば、原語で読むべきですが、翻訳でも、原語を想定しながら読む、というか、13世紀のトマス・アクィナスが、ラテン語訳されたアリストテレスのテキストを、ギリシア語で読んでいないのに、ほぼ、正確に理解して註解を書いているのには驚きます。そういうことができる場合もあるのです。最近、仏教関係のことで、調べものをしていて、「供養」というのが、自分が日常的に理解している意味とは違う予感がするので、漢訳される前のサンスクリット pūjā の語根 pūj の意味を梵英辞典（手許にあるのは、Apte の中辞典）で見ても、to adore, worship, revere, honour, receive with respect となっていて、それはそうなんだろうけれども、どれか一語で訳せる、というものではないことだけは、わかりました。こういう作業を地道に行なって、テキスト全体の中で、文脈の中での意味を探ることが必要なのでしょう。

35 Q.6 p.27 と p.28 の1.「何であるか」の問いに答えるもの、2.「最も～であるのは何か」の問いに答えるもの、3.「何をなすべきか、なすべきでないか」の問いに答えるもの、それぞれはじめて出会いました。とても興味をかきたてられました。3.はとても具体的で驚きました。2.はその逆も知りたいです。

A.6 2.の逆というのは、否定のかたちで、「最も～でないのは何か」の問いに答えるもの、ということでしょうか。この資料は、「アクウスマタ」(akousmata, アクウスマ akousma の複数形で、「聞かれたこと、口頭の教え」と呼ばれるもので、Q.6にあるように、3つのグループに分けられています。ですから、2.の逆というのは、残念ながら、伝えられていません。

Q.7 パルメニデスの言うことは、ある意味で正しく、ある意味では無理があるようになんとなく感じました。（今よりまだ多くのことが分かっていなかった時代だからこそ、当てはまることもありそうかどうか... うまく言えませんが、そう思いました。）

45 A.7 パルメニデスの魅力は、例えば、「あるものはあり、あらぬものはあらぬ」にしても、こ

れ自体の意味がどういうことであるか（それも重要ですが）とは別に、パルメニデス以降の人たち、つまり、プラトンのイデア論や、レウキポッスやデモクリトスの原子論が、そもそも、考え出されるきっかけになっている、という点にあると思います。

5 Q.9 参考文献の話でちょっと思い出したのですが、「参考になりました」ではなく「勉強になりました。」というべきという内容の文章を読んだことがあります。

「参考」というと、「足しになりました。」(?) みたいな意味だから、おこがましい、というようなことだったのですが、では先輩などから「参考」になりそうなありがたい資料をいただいた時、「参考にさせていただきます。」は不適切なのかな、といつも迷ってしまいます。

10 A.9 前回の Q.3 や Q.4 に関することですね。「参考」というのが、どういうことなのか、直接にせよ、間接にせよ、「引用」と「剽窃」とは、「参考」はどう違うのか、一度、きちんと調べて考えておく必要があることだと思います。

英語で、reference とか refer とかいうと、「参考」とか「参考にする」とかいうよりは、はつきり、「言及」とか「言及する」というほうがもとの意味に即していると思われまふ。「参考書」を a reference book という場合、「参照」して、その本から何らかの情報を得て、それを、自分が行なっている作業（例えば、論文やレポートを書いたりすること）に反映させる、という意味でしょう。15 その場合、その反映させる内容は、その「参考書」からの、直接引用になるか、自分の言葉で言い換えての間接引用になるか、あるいは、考え方や発想だけを借りて、具体的な事例は自分で考え出すか、ということになるでしょうが、どの場合も、その「参考書」のどの箇所から、何を「参考」にしたのか（というより、何を借りたのか）を、ページを示して、典拠を明らかにしないと（これが、refer 「言及する」ということ）、やはり、「剽窃」の一種になってしまうのではないのでしょうか。20

大槻文彦の『言海』では、「さんかう、マジヘカンガフル、種種ノ書ヲ見合ハセテ考ヘ正ス」とあります。

自分が書く文章（地の文）と、他人の書いたものを明確に区別して、論文やレポートを書くためには、他人の書いた文献からの「引用」を明確に示す必要がありますが、何かを「引用」するか25 「剽窃」するかしかない、という二分法で考えると、どうも、「参考」にする、というのは、この「引用」と「剽窃」の間の、しかも、どちらかというところ、「剽窃」に近い、きわどいところに位置するような気がしてきました。その意味でも、「参考文献」という表現はやめて、単に「文献」とするほうがよいでしょう。

30 日本語としての「参考」という語の使われ方をもっと調べる必要がありそうです。何かわかたら、是非、教えて下さい。

Q.10 パルメニデスの破裂音が馬のひづめの音を意識しているということ、面白かったです。音のリズムというのは日本語にしかふれたことがなかったのですが、やはり外国語にもあるのだなあと（当然かもしれませんが）しみじみ思いました。

35 Q.10' この間の授業で聞いて以来、パルメニデスの詩が耳についてはなれませんが、気がついたら「ヒッポイ・タイ・メ・・・」と口ずさんでいます。半期の間、本当に（本当に）楽しい授業をありがとうございました。

A.10 単語の句切りは、・で句切り、ただし、リエゾンして、前の単語の末尾の子音を次の単語の語頭に記すと、最初の三行は次のようになります。

hippoi tai me pherousin, hoson t'epi thumos hikanoi,

40 ヒッポイ・タイ・メ・ペルーシ・ノソン・テピ・テューモ・シカーノイ、

pempon, epei m'es hodon besan poluphemon agousai

ペンポ・ネペイ・メ・ソドン・ベーサン・ポリュペーモ・ナグーサイ

daimonos, kata panat'aste pherei eidota phota.

ダイモノ・セー・カタ・パン・タステー・ペレイ・エイドタ・ポータ。